

# 雪柳

泉鏡花

青空文庫



小石川白山はくさんのあたりに家がある。小山弥作氏やさく、直槇ちよくしんは、筆者と同郷の出で、知人は渠かれを獅子屋ししやさんと渾名あだなした。誉過ほめすぎたのでもありません、軽く扱ったのでもありません。

氏神の祭礼に、東京で各町内、侠勇きおいの御神輿おみこしを担かつぐとおなじように、金沢は、廂ひさしを越すほどの幌ほろに、笛太鼓三味線さみせんの囃子はやしを入れて、獅子を大練りに練って出ます。その獅子頭に、古来いわれが多い。あの町の獅子が出れば青空も雨となる。一いっぴようの風を捲まく。その町の獅子は日和を直す。が、まけるものか荒びは激しい、

血を見なければ納まらないと、それを矜ほこりとし名誉として、由緒ある宝物になつてゐる。こういうのは、いづれ名ある仏師、木彫の達人の手になつたものであろうと思う。従つて、不断この仕事があるわけではないので、亜流の職人が手間取にこしらえる。一種、郷土玩具おもやげおもちゃの手頃な獅子があつて、素材しらすきづくりはもとより、漆黒で青い瞳、銀の牙きば、白い毛。朱丹にして、玉の瞳、金の牙、黒い毛。藍青らんせいにして、黒い牙、赤い毛。猛たけき、凄すさまじき、種いろいろ々ろで、ちよいとした棚の置物、床飾り、小児こどもの玩もぶのは勿論あその事。父祖代々この職人の家から、直植は志を立てて、年とし紀十五六の時上京した。

彫刻家にして近代の巨匠、千駄木せんだぎの大師匠と呼ばれた、雲原明

流氏の内弟子になり、いわゆるけずり小僧から仕込まれて、門下の逸材として世に知られるようになりました。——獅子屋というのはそうした訳で、人品もよし、腕も冴<sup>さ</sup>えた。この人物が、四十を過ぎて、まのあたり、艶<sup>えん</sup>異、妖<sup>よう</sup>変<sup>へん</sup>な事実にぶつかつた——ちと安価な広告じみですが、お許しを願つて、その、直<sup>じき</sup>話をここに、記そうと思う。……

ついては、さきだつて、二つ三つ、お耳に入れておきたい話があります。

以前、まだ、獅子屋さんの話をきかないうち、筆者は山の手の夜店で、知った方は——笑つて、ご存じ……大嫌だいきらいな犬が、人ひととごみ混とごみの中から、大鰻おおうなぎの化けたような面つら……なに馬鹿を言え、犬の面がそんなものに似てたまるかと……御ご尤もつともであります、どうも時々そう見える。——その面が出はしまいかと気にしながら、古本古雑誌の前に踞しゃがみこ込んで、おやすく買求めて来ましたが、半紙綴つづり八十枚ばかりの写本、題して「近世怪談録」という。勿論江戸時代、寛政、明和の頃に、見もし聞きもした不思議な話を筆写したものでありますが、伝写がかさなっているらしく、草行まじりで、丁寧だけれども筆耕が辿たど々たどしい。第一、目録が目線であります。下総しもとうさが下綱したづなだったり、蓮花れんげが蓬よもぎの花はなだったり、

鼻が阜ふになつて、腹が椶えのきに見える。らりるれろはほとんど、ろろろろで、そのまま焼耐しょうちゆうび火が燃えそうなのが、みな女筆だからおもしろい。

中に、浅草だの、新吉原だの、女郎だのという字は、優しく柔かにしつとりと、間違ひなくかいてある。どうも、このうつしものを手内職にした、その頃の、ごしんぞ、女房にようぼ、娘。円鬚まるまげか、島田か、割鹿わりかのこ子。……やつれた束ね髪でもありませんようか、薄暗あんどんい行燈のもとに筆をとっている、ゆかしい、あわれな、寂わびしい姿が、何となく、なつかしく目に映る。何も、燈心の灯影は、夜と限つたわけではありません、しよぼしよぼ雨の柳の路地の窓際でもよし、夕顔のまばら垣に、蚊遣かやりが添つても構ひはしない。

……内職の仕事といえは、御殿や、お邸やしきでさえなければ、言わずともその情景は惚しのばれましょう。

ところで、何しろ「怪談録」です。怨おんねん念の蛇がぬらぬらと出

たり、魔界ちまたの巷ちまたに旅人さまよが徜徉さまよつたり。……川柳にさえあるのです

……（細首つかを掴つかんで遣手蔵やりてへ入れ）……そのかほそい遊女の責殺

された幻うらばしごが裏階うらばしご子たたずにゑんだり、火の車を引いて鬼が駆けたり、

真夜中の戸障子が縁の方から、幾重いくえにも、おのずからスツと開あい

て、青い坊さんが入つて来たりするのでありますから、がたがた

がた、酒屋の小僧が台所の戸を開けても、ハツと思ひ、蚊遣の火

も怪しく燃えれば、煙の末に鬼あが蹶あわれ、夕顔しべの蕊しべもおはぐろで

ニタリと笑う。柳しずくの雫しずくも青い尾を曳ひく。ふと行燈かまきりに蠟かまきり螂かまきりでも留



つたとする……眼まなこをぎよろりと、頬ほお被かぶりで、血染おのの斧おのを。

「あれえ。」

筆を持った白い手を、わななかせたに違いない。

時に、白い手といえは、「怪談録」目録の第一に、一、浅草川船中にて怪靈に逢う事、というのがあつた。

当時の俳諧師、雪中庵の門人、四五輩。寛延としつまびらかならず年不詳、

霜月のしかも晦日みそか、枯野見かれのみからお定まりの吉原へ。引手茶屋で飲

んだのが、明日あすは名におう堺町葺屋町ふきやちようの顔見世、夜うちの中から前

景氣にぎわの賑にぎわいを茶屋で見ようと、雅名を青楼へ馳はせせず芝居に流した、

どのみち、傘雨さんうさん（久保田氏）の選には入りそうもないのが、

堀から舟で乗出した。もう十時よつを過ぎている、やがて十二時このつへさき。舳

が蔵前をさすあたり、漾蕩たる水の暗さにも、千鳥の声に、首尾の松が音ずれして、くらやみから姿をさしのべ、舟を抱くばかりに思うと、ぴたりと留つて動かない。櫓づかいをあせる船頭の様子も仔細ありげで、夜は深し、潮も満ちて不気味千万、いい合させたように膝を揉合い、やみを透すと、心持、大きな片手で、首尾の松を拝んだような船の舳に、ぼつと、白いものが搦んでいゝる。呼吸を詰めて見透すと、白い、細りした、女の手ばかりが水の中から舳に縫つているのであります。「さながら白き布かと見えて、雪のごとし」と、写本には書いてある。うつくしい女の手が布に見えたのは、嘘ではないらしい。狂言の小舞の謡にも、

十六七は棹に掛けた細布、折取りやいとし、手繰りより

やいとし……

肌さえ身さえ、手の縫った、いとしいのを。

「やあ、畜生。」

この怪もの、といったか、河童かわづま、といったか、記してないが、

「いでその手ぶし切落さんと、若き人、脇指わきざし、」……は無法で

ある。けだし首尾の松の下だけの英雄で、初めから、一人供をし

たたいこもち幫間たすけまが慌てて留めるのは知れている。なぜにその手を取つ

て引上げて見なかつたろう。もし枝葉に置く霜の影に透したらん

に、細い腕かいなに袖絡みから、乳乱れ、棲流つまれて、白脛しろはぎはその二片ふたひらの

布ながれを流ながれに搔絞かきしぼられていたかも知れない。

船頭もまた臆病おくびようすぎる。江戸えど兎とつこだろうに、溺おぼれた女とも、

身投わきまとも弁へんえず、棒ぼう杭ぐいのようにかたくなつて、ただ、しい、しい、しずか静にとばかり。おのおの青くなつて、息を凝らすうちに——

「かの白き手、舳をはなし、水中に消入りぬ。」……

潮に乗つて船は出た。

「が、しかし、水に溺れましたか、あるいは身投の婦人が苦しき  
のあまり、たすか助りたさにと申すような……」

ぼうさん幫間、もう遅い。分別おくれに、船頭と相顧みて、「船中この  
あたりにては、かような不思議はままある事、後に聞くもの、驚  
かずという事なし、いかなるものやらん合点ゆかず、恐しかりけ  
る事なり。」である。

が、ここを筆耕した、上品な、またおつとりと、ものやさしい、

ご新造、娘には、恐しかりける事より、何となく、ものあわれに、悲しく、うら寂しく、心を打たれたらうと思う。

あとは隅田の凧である。

この次手に――

浅間山の麓ふもとにて火車往来の事

軽井沢へ避暑の真似をして、旅宿やどの扨はらいにまごついたといふので

はない。後世ごせこそ大事なれと、上総かずさから六部に出た老人が、善光

寺さんけいへ参詣さんけいの途中、浅間山の麓に……といえは、まずその硫黄いおうの

香においと黒煙くろけぶりが想われる。……さて行悩んで、侘わびしげなる茶屋に

立寄り休むうちに、亭主がいうには、去年、(享保年中)八月中

ばの事――その日も、やがて八ツ下り。稗ひえきび黍あやの葉を吹く風もや

や涼しく、熔岩とともにころがった南瓜かぼちゃの縁に、小休みの土地  
 のもの二三人、焼土やけつちの通り径みちを見ながら、飯盛めしもりの彼女きやつは、赤  
 い襦袢じゆばんを新しく買った。笄こうがいを質に入れたなどと話していると、  
 遙はるかに東の方かたよりむら立つ雲もなく、虚空こくうを渡るがごとく、車の駆  
 来る音して、しばらくの間に目まのあたり前へ近づいたのを見ると、あ  
 ら、可恐おそろし、素裸すはだの荒漢あらおとこ、三人、車を宙に輾ひくごとし。真まっさ  
 先きに、布、紙を弁ひるがええず翻ひるがえした、旗おもての面に、何と、武州こおり、郡の名、  
 村の名、人の名——（ともに憚はばかると註してある）——歴々ありありと記  
 したるが矢よりも早く飛過ぐる。火を揚げ煙を噴いた車の中に、  
 炎あの擲からんだように腰の布くれないが紅に裂けて、素裸すはだであろう、黒髪くろかみばか  
 り蓑みののごとく乱れた、軀むくろをのせた、輻やが軋きしり、轍わだちとどろが轟こうかくき、磔こうかく

たる石径を舞上つて、「あれあれ浅間山の煙の中へ火の尾を曳ひいて消えて候そろよ、六部どの。われら世過ぎにせわしき身は、一夜の旅も、糧かてゆえに思うに任せず、廻国のついでに、おのずから、その武州何郡、何村に赴きたまわば、「事のよしをも訪といとむらいたまえと、舌を掉ふるつて語つたというのである。——嘘うそばかり。大小きみたち哥哥、宿場女郎の髪かみの香、肌はだざわりなど大話をしていたればこそ、そんなものが顕あらわれた。猪ぶか猿さるを取つて、威勢よく飛んだか、早伝馬が駆出したか、不埒ふらちにして雲助どもが旅の女を攫さらつたのかも分らない。はた車の輪りんの疾とく軋きしるや、秋の夕日に尾花おしなを燃もやさないと誰たれが言おう——おかしな事は、人が問といもしないのに、道中、焼山やけやま越こえの人足である——たとえ緊しめなくても済すむものを、

虎の皮には弱つたと見えて、火の車を飛ばした三個みつの鬼が、腰に何やらぼろ襪まを絡まとつていた、は窮きうしている。……ただし窮きうしてま  
で虎の皮代用の申訳をした、というので、浅間山の麓の茶屋の亭  
主は語り、六部の爺じいさま様は聞いて、世に伝えたのは事実らしい。

## 三

これに続いて、

目白辺の屋敷猫を殺しむくいし事

下谷したや辺にて浪人居宅けりよう化けり霊ようありし事

三州岡崎宿にて旅人ひひ狒ひひ々に逢う事



奥州にて旅人山に入り琴の音を尋ねる事

題を見ただけでも、唐からから渡りものの翻案で、安価な上方版  
とぎぞうし  
 のお伽稗子そのままなのが直ぐ知れる。

新吉原山口にて客幽霊を見し事

おなじちみちよう

同角 町海老屋の女郎客の難に逢いし事

二つとも、ものあわれな譚はなしだが、吉原の怪談といえ、おなじ  
 ようなのがいくらもあります。

こうずけのくに

上野 国岡部の寺にて怪しき亡者の事

みののくに

美濃 国の百姓の女房大蛇おろちになる事

はいふき

どうも灰吹から異形になって立たち頭あられるのに、蓋ふたをしたい、

煙けむりのようなが多い。誰の気もおなじと見えて、ずらりと並べた

目録の上に、いつかこの写本を見た読者の心をひいたらしく、ただ一つ題の上に、大きな○<sup>テン</sup>をかけた一条がある。

○浅草新堀にて幽霊に行逢う事

曰く、ここに武家、山本氏某<sup>うなむしがし</sup>若かりし頃、兄の家に養わる、すなわち用なき部屋住<sup>すみ</sup>の次男。五月雨<sup>さみだれ</sup>のつれづれに、「どれ書見でも致そうか。」と気取った処で、袱紗<sup>ふくさ</sup>で茶を運ぶ、ぼつとりものの腰元がなかつたらしい。若い身空にふりみふらずみ、分けてその日は朝から降りつづく遣瀬<sup>やるせ</sup>なさに、築地<sup>きよき</sup>の家を出て、下谷<sup>みや</sup>三の輪<sup>わ</sup>辺<sup>しるべ</sup>の知<sup>し</sup>辺<sup>べ</sup>の許<sup>もと</sup>へ——どうも前に云った雪中庵<sup>せつちゆうあん</sup>の連中<sup>れんちゆう</sup>といい、とかく赤蜻蛉<sup>あかとんぼ</sup>に似て北<sup>きた</sup>へ伸<sup>の</sup>すのは当今<sup>けふ</sup>でいえば銀座浅草<sup>ぎんざせんそう</sup>。むかしは吉原の全盛の色香に心を引かれたらしい。——三の輪の知人在

宿にて、双方心易く、よもやま四方山の話に夜が更けた。あるじ泊りたまえと平にいう。いや夜あるきには馴なれている、雨も小留こやみに、月も少し明あかければ途みちすがら五位鷺ごいさぎの声も一興、と孔雀くじやくの尾の机にありなしは知らぬ事、ほととぎす時鳥といわぬが見つつけものの才子が、ちようちん提灯は借らず、げたば下駄穿きに傘を提げて、さつきやみ五月闇の途すがら、ステツキ洋杖とは違つて、雨傘は、開いて翳さしても、畳んで持つても、様子そとに何となく色気が添つて、恋の道づれの影がさし、若い心を噉そとられて、一人ではもの足りない気がすると言う。道を土手へ切れかかった処に、時節がら次男、懐中の湿つぽさが察しられる。寂しくわが邸を志して、その浅草新堀の西福寺——震災後どうなつたか判らない——寺の裏道、卵塔場の垣外へ来かかると、雨上

りで、妙に墓原が薄うすあかる 明あきらいのに、前途ゆくてが暗い。樹立こだちともなく、  
 葎むぐらくぐりに、晴れても傘は欲しかろう、草の葉の雫しずくにもしよんぼ  
 り濡々とした、瘦やせぎすな女が、櫛くしまき卷まきの頸えり細く、俯うつむいた態なりで、  
 棲つまを端折りに青い蹴けだ出しが、揺れる、と消えそうに、ちらちらと  
 浮はだしいて、跣足で弱々と来てすれ違ちがった。次男の才子は、何と思つ  
 たか傘を開いた。これは袖で抱込うかむ代りの声のない初心うぶな挑あしらい合  
 であつたろう。……身に沁しむ、ものあわれさに、我ながら袖も  
 墨染となつて、蓮はすの葉に迎むかへようとしたと、後あとに話した、という  
 のは当にならぬ。血気な男が、かかる折から、おのずから獵奇なげと  
 好色の慾よくねん念おどが跳はつて、年の頃人の妻女か、素人ならば手なで情なさけを  
 通とわせようし、夜鷹よたかならば羽搔はがいしめて抱かかこうとしたろう。

おんな  
 婦は影のように、衣ものの縞目を、傘の下に透して、つめたく  
 行過ぎるとともに、暗く消えた。

その摺れ違つた時、袖の縞の二一条ばかりが傘を持った手に触  
 れたのだつたが、その手が悚然とするまで冷え透る。……

持ちかえて、そのまま傘を畳んで歩行き出すと、ものの一二町  
 の間というのに、女の袖の触つた片手——内々握つたかも知れな  
 いが——腕から肩の附根まで、その冷たさ氷のごとし。振つてみ  
 ても、敲いてみても、しびれるほどで感じがない。……

今も講談に流布する、怪談小夜衣草紙、同じ享保の頃だという。  
 新吉原のまざり店、旭丸屋の裏階子で、幫間の次郎庵が  
 三つならんだ真中の厠で肝を消し、表大広間へ遁上る、その

階子の中段で、やせた遊女おいらんが崩れた島田で、うつむけにさめざめ泣いているのを、小夜衣の怨おんりよう霊とも心附かず、背中をなでると、次郎庵さん、と顔を上げて、冷たい手でじつと握った、持たれたその手が上と下に、ふわりふわり——幫間に尾花も変だ、芋ずいきが招くように動いて留やまらない。たちどころに半病人となつて、住居すまいへ帰り、引被ひっかざいても潜つても、夜具の袖まで、ふわふわ動いて、押えても緊しめても、頻しきりに動く。学者は舞踏病の一種だと申されよう。日を経て、ふるえの留しなまらぬままに、一念発起して世を捨てた。土手の道哲の地内じないに、腰衣で土に坐り、カンカンと片手で鉦かねを、敲たたき、たたき、なんまいだなんまいだなんまいだ、片手は上下うへしたに振っている。ああ、気の毒だと、あたりの知人しりびと、

客筋、の行きかえりの報謝に生きて、世を終った、手振坊主の次郎庵と、カチン（講釈師の木のうちまい処）後にその名を残した、というのと、次男の才子の容体が、妙に似ている。

が、この方は無事に助かった。細身の大小、まだ前髪立ともいうべき年ごろに、余りといえば手の冷えよう、築地まで帰るのが心もとなく、さいわい蔵前に姉の縁づいた邸があつた。いうまでもなく義兄の住居。<sup>すまい</sup>真夜中に慌しく門を敲いて驚かすと、「馬が一所か。」とも言わず、兄は快く一間に招じた。上品な姉の、寝乱れた姿も見せず、早くきちんと着かえて、出迎へたのも頼もしい。

途中、五位鷺の声もきかず、ただ西福寺裏で行逢つた、寂しく、

あわれな婦おんなを聞くと、兄は深く頷うなずいた。が、まずいうがままにいたされよ、で、ご新姐しんぞに意を得させ、鍋なべをもつて酒を煮た。下戸げこは知つたが、唯一の良薬と、沸爛にえかんの茶碗酒。えい、ほうと四辺あたりを払つた大名飲のみ。

——聞いただけでも邪氣が払える。あとをなお沸立にたつた酒で、幾度いくたびもその冷込んだ手を洗わせ、やがて、ご新姐の手ずから、絹きぬ衾ふすまを深々と被かぶせられると、心も宙に浮いて、やすらかにぐつすり寝た。目がさめると、雨は降っていたが気は晴々となつた、と言います。三田の豪傑だと、片腕頂戴するところ、この武家の少年は、浅草で片手を氷にしようとした、いささかも武勇めかかないだけに、読んでいても、これは事実だと思われる。



ここにもう一条「怪談録」から大意を筆記したい事がある。

### 大森辺魔道の事

明和三年弥生やよいなかば——これは首尾の松の霜、浅間の残暑、新堀の五月雨などとは事かわつて、至極陽気がいい。川崎の大師へ参詣かたがた……は勿体ないが、野掛のがけとして河原で一杯、茶飯と出ようと、四谷よつや辺の大工左官など五六人。芝、品川の海の景色、のびのびと、足にまかせて大森の宿しゆくなか中なかまで行くと、街道をひいて通るのではない、馬五郎、という大工が、このあたりに縁類の久しい不沙汰をしたのがあり、ちよつと顔出して行きたし、お前さん方は一足お先へ。「おう、そうか、久しぶりと聞けば、前さ方きでもすぐには返すまいし、戸口からも帰られまい、ゆっくりな

せえ、並木の茶店で小休みをしながら待とうよ。」で、馬五郎がその縁類を訪れた。ここの辞儀挨拶は用がないから省略する。どれ、連中に追つおっこうと、宿はずれへ急ぐと、長閑な霞のきれ間のどかとも思われる、軽く人足ひとあしの途絶えた真昼の並木の松蔭に、容子のようすいい年増が一人、容の賤かたぢいやしからぬのが、待構えたように立ってて、

「もし、もし。」

女主人あるじが是非お目にかかりたく、それゆえお迎えに参りました、と言う。

「へへえ、奥様がね。へい、はてな？」

お逢い遊ばせばわかる事、お手間は取らせませぬ、と手がのび

て袂たもとを曳ひかれると春風今を駘たけなわ蕩わらびに、蕨うど、独活うどの香に酔ったほど、  
 馬は、うかうかと歩ある行き出したが、横よこなわて 睨なわて 少しばかり入ると、  
 真向こたちうに樹立すみしず深く、住もんがまえ 静構めた見事な門もんがまえ 構構の屋敷が見える。  
 掃清おんなめたその門内へ導くと、ちよつとこれに、唯ただいま 今ご案内。で、  
 婦おんなは奥深く切戸口と思うのへ小走こばしりに姿を消した。式台のかかり、  
 壁の色、結構、綺麗さ。花の影、松風の中に一人立つ大工の目を  
 驚かして、およそ数寄すきを凝すらした大名の下屋敷にも、かばかりの  
 普請はなからう。折から鶏ひとしおの声の遠く聞えるのが一入里離れた  
 思いがする……時しも家やの内遠い処に、何となく水の音……いや  
 湯殿で加減を見るような気配がした。いかにとぼんとした馬なれ  
 ばといつて、広い邸の門内の素真すまんなか中には立っていない。片傍かたわき

に、家来衆、めしつかわれるものの住むらしい小造りな別棟、格子づくりの家が<sup>うち</sup>あつて、出窓に、小瓶に、山吹の花の挿したのが<sup>のぞ</sup>覗かれる。ふとその窓があくと、島田<sup>まげ</sup>鬻の若い女の、まるい顔が、馬を見ると、はツとした様子で、

「あれ、親方さん。」

「ええ。」

「どうして、こんな処へ。ここをどこだと思ひなさいます。――畜生道、魔界だことを、ご存じないのでございますか。」

「やあ。」

「人間のもとの身では帰られませんよ、どんな事がありましたも、ここで何かめしあがつたり、それからお湯へ入つてはいけません。」

こういううちにも、早く、早くお遁げなさいまし、お遁げなさいまし。」

「やあ、お前さんは。」

「三年あとに、お宅に飼われました、駒こまですよ、駒……猫ですよ。」

ぼったり、出窓の障子が上敷居うわじきいから落ちて閉った時、以前の年増がもう目の前。

「お待たせいたしました。さあさあどうぞ。」

「へい、いえ、その。……」

「さあ。」

「へい、いえ、その。」

「さあ、まあ、どうなすつたんでございますねえ。」

凄<sup>すこ</sup>い。じつと見た目が袂を引いたより力が強い。見す見す魔界と知りながら、年増の手には是非もない。馬は、ふらふらとなつて切戸口から引入れられると、もう奥庭で、階段のついた高縁の、そこが書院で、向つた襖<sup>ふすま</sup>がするすると左右へ開くと、下げ髪にして襦<sup>うちかけ</sup>襦<sup>さば</sup>を捌いた、年三十ばかりの奥方らしいのに、腰元大勢、ずらりとついて、

「待ちかねました。よう、見えたの。」

と莞<sup>にっこり</sup>爾。

その襦<sup>あや</sup>襦<sup>にしき</sup>、帯、小袖の綾、錦。腰元の装<sup>よそおい</sup>の、藤、つつじ、あやめと咲きかさなつた中に、きらきらと玉虫の、金高<sup>きんだかまきえ</sup>蒔<sup>ぜんわ</sup>絵の膳

腕うでが透といて、緞どんす子のしとねがおおあげは大揚羽おおあげはの蝶ちょうのように対たいに並ならんだ。

「草鞋わらじをおぬぎになるより、さきへ一風呂。」

「さつぱりと、おしめしあそばせ。」

腰元こしもとのもろ声を聞くと、頭かぶから、風呂桶おけを引被ひつかぶせられたように動どうてん顛てんして、傍わきについた年増としぞうを突飛つひばすが疾はやいか——入いる時は魂たまが宙そらに浮ういて、こんなものは知らなかつた——池いけにかかつた石いしだたみ、目金橋めがねばしへ飛上とる拍子はしに、すつてんころりと、とんぼう返かへり、むく起たきの頭かぶを投飛なげばされたように、木戸口きどぐちから駆出かすと、

「遁にがすなよ。」

という声こゑがする。

「追おえ、追おえ。」

「娑婆へ出た。」

と口々に、式台へ、ぱらぱらと女たち。

門外へ足がのびた。

「手桶では持重りがして手間を取る、椀、椀、椀。」

といった……ここは書きとりにくい。魔界の猫邸であるのに、

犬の声に聞えます。が、白脛か、前脚か、緋縮緬を蹴て、高

飛びに追かけたお転婆な若いのが、

「のばした、叶わぬ。」

と、その椀を、うしろから投げつけたのが、空を足掻く馬の踵

に当たると、生ぬるい水がざぶりとかかった。

生命拾を、いや、人間びろいをしたのであるが、家に帰って、



草鞋わらじを脱ぎ、足を洗う時心づくど、いやな気味の水のかかった処に、もさもさ黒い毛が生えていた。剃つても削つても、一夜のうちに湧わいてのびる。……のみならず、当分は、

「腕。」

と一言ひとこというさえ、口を塞ふさいで、顔の色を変えた。「不思議にも浅間しく人々にも見せ申したり。馬五郎に心安ければ目まのあたりこれを見る。なかなか浮きたる事にはあらず。」というのであります。

浮きたる事にも、飛んだる事にも、馬を鹿に、というさえあるに、猫にしようとした……魔魅の振舞も沙汰過ぎる。聞くからに荒唐無稽ことうとうむげいである。第一、浅学寡聞かぶんの筆者が、講談、俗話の、佐

賀、有馬の化猫は別として、ほとんど馬五郎談と同工異曲なのが  
 ちよつと思ひ出ししても二三種あります。肥後国ひごのくに、阿蘇あその連峰猫ね  
こだけ 嶽は特に人も知つて、野州にも一つあり、遠く能登のとの奥深い処  
 にもある、と憶おもう。しかるに前述、獅子屋さん直槇の体験談を聞  
 くうちに、次第に何となく、この話に、目鼻がつき、手足が生え  
 て、獣けものか、鳥か、稀有けうな形で、まざまざと動き出しそうになつて  
 来た。

と云つて、いかにすればとて、現代に化猫は出はしません。そ  
 れは話につれて、自然おわかりになりました。就いては場所—  
 | 場所は麻布あざぶ—狸穴まみあなではなく—二の橋あたり、十番に近い  
 洒落しやれた処ゆえ、お取次をする前に、様子を見ようと、この不精

ものが、一度その辺へ出向いた、とお思い下さい。

#### 四

「ああ、久しぶりだ。」

電車を下りて、筆者は二の橋に一息した。

橋もかわった。その筈はずの事で、水みな上な滝か太郎さんが白しろ金かねの本

宅に居た時分通ったと思うばかり、十五六年いや二十年もつとに  
なる。秋のたそがれを思い出す。三田台の坂も今と違つて、路は  
暗し、水は寂しい。橋板は破れ、欄干は朽ちて、うろぬけて、夜  
は狸穴から出て来て渡るものがありそうで、流れに柵しがらんだ真ま黒くろ

な棒杭が、口を開けて、落葉を吸った。——これ、まだ化けては  
 不可いけない——今は真昼間まっぴるまだ。見れば川幅も広くなり、鉄橋にか  
 わつて、上の寺の樹蔭こかげも浅い。坂を上あがつた右手に心覚えの古ふる櫓  
 も枝が透いた。踞しゃがんで休むのは身は楽だけれども、憩うにも、人  
 を待つにも、形が見つともない、と別べつ嬪びんの朋友ともだちに、むかし叱  
 られた覚えがある。そこで欄干もたに凭たれかかつて煙草たばこを——つい橋は  
しだもと 袂たもとに酒場もあるのに、この殊勝な心掛はねを匆散はならして、自動車  
 が続けさまに、駆通る。

解った。いやしくも大東京市内においては、橋の上で煙草を喫の  
 む時世ではないのである、と云うのも、年を取ると、口惜くやしいが愚  
 痴に聞える。

ふけた事をいって、まず遊ばない算段をしながら、川添の電車道を、向う斜めの異な横町へ入って行く。……

いきなり曲角の看板に、三業組合と云うのが出ている。路地の両側の軒ごとに、一業二業、三業の軒燈が押合つて、灯は入らないでも、カンカン帽子の素通りは四角八面に照らされる。中にも真円い磨硝子のなどは、目金をかけた梟で、この斑入の烏めと紺 緋こんがすりの単衣ひとえを嘲あざけるように思われる。

立込んだ家続つづきだから、あつちこち、二階の欄干に、紅い裏あかがひるがえり、水紅色ときいろを扱かつた、ほしものは掛かつていても、陰こもが籠こもつて湿ぬっぽい、と云う中うちにも、搔かまきまきの袖には枕まくらが包かまれ、布団ふたんの綴つづり糸いとに、待人こよりの紙紮こよりが結むすばつていそうだし、取残すだれした簾すだれの目めから

鬢びんぐし櫛しが落ちて来そうみどりで、どうやら翠の帳とばり、紅の閨くれないを、無断で通

り抜ける気がして肩身が細い。

覗のぞきはしないが、小窓、櫺れんじ子こに透いて見える、庭背戸には、萩

の植込、おしろいの花。屋根越の柳の青い二階も見えた。あれは

何の謎だろう。矢羽の窓かくしの前に、足袋がずらりと干してあ

る。都鳥と片帆の玩おもちゃ具つとを苞つとに挿した形だ、とうつとり見上げる

足あしもと許もとに、蝦ひきがえる蟄ひきがえるが喰く附つききそうサボテンな仙人掌こつとつの元こつとつ突とつとした鉢植こつとつに

驚くあとから、続いて棕櫚しゆろの軒下そびに聳そびえたのは、毛の中から猿が

覗のぞきそうたたずでいながら、却たたずつてさまようものをしばらくたたずイませ、憩たたず

わせる蔭を見せた。その仙人掌サボテンに下駄をつまだて、棕櫚しゆろに帽子を

うつむけなどして、横に曲り縦に通ると、一軒、表二階の欄干を

小さな楓かえでに半ば覗かせて、引込んだ敷石ひっこに、いま打った水らしい、流れるばかり雫しずくが濺たう網代戸あじろどを左右に開いた、つい道端の戸口に、色白な娘わかが一人、芸妓げいしやの住居すまいでないから娘だろう。それとも年の少いかみさんだろうか。――

（――かみさんだと、あとの直槓の話にそのままだが、誂あつらえ通りそうはゆくまい。――）

女中に職こごすぎるのが、踞こごんで、両膝で胸おきを压おさえた。お端折はしより下の水紅色に、絞りで千鳥を抜いたのが、ちらちらと打水に影を映した。乱れた姿で、中形青海波せいがいほの浴衣の腕あらかを露呈あらわに、片手に黒い瓶かめを抱いだき、装塩もりじおをしながら、撮つまんだ形なりを、抜いて持った銀の簪かんざしの脚かで、じやらすように平直ならしていた。

流行の小唄端唄はうたなど、浄瑠璃じょうるりとは趣かわつて、夢にきいた俗人の本歌のような風情がある。

荒唐無稽だの、何だのというもの、「大森辺魔道の事」人はこんな時に、この物語を思い出すが、身のためだろう。

その黒い瓶を取つて投げられたら。……

筆者は足早たちに立退いた。

出抜けると丘が向うに、くつきりと樹が黒い。山下町はこの辺らしい。震災に焼けはしなかつた土地と思うが、往来ゆききもあわただしく、落着きのない店屋が並んで、湿地しけちか、大溝おおどぶを埋めたかと思え、ぼくぼくと板を踏んで渡る処が多い。

ここへ来たのは、もう一ヶ処、見て戻りたい場所があつたから



で。……足場のよくない、上り道だが、すぐ近くに、造作なく、遠い心覚えの、見当がついた。

——一本松と、その一基の燈籠とうろうである——

おなじ一本松という——名所が、故郷なる金沢、卯辰山うたつやまの山の端はにあつて、霞を絡まとい、霧を吸い、月影に姿を開き、雨夜あまよのやみにも灯とも一つ、百万石の昔より、往来ゆききの旅人に袖をあげさせ、手を翳かざさせたものだった、が、今はない。……

浮浪の徒の春の夜の焚火たきびに焼けて、夜もすがら炬火たいまつを漲みなぎらせ、あくる日二時頃まで煙を揚げたのを、筆者は十四五の時、目のあたり知っている。草の中に切株ばかり朽ちて残った。が、年々春も酣たけなになると、おなじ姿の陽炎かげろうが立つといひます。むかし享保

頃、ここに若い人の、きれいな心中があつて、地方の事で数の少い、また多くてはならないが、もののあわれのいいつたえを、幼い耳にも伝えられたものだった。

麻布の松は、くらがり坂ざかの上にかくれて、まだ見えない。道の右手に、寺の石磴いしだんがすつくと高い。心なしか、この磴が金沢の松の上り口あがにそっくり似ている。(ここを、直槓あがが上つた事はやがて知れます。)

また上り坂なりの石磴だから、いよいよ聳そびえて、階子はしごを斜ななめに立てたようである。下に、道端の高い空地で、草の中に子供が大勢遊んでいるのも、卯辰山のその麓ふもとを思い出させた。

「一本松の先に、ちよつとここを上つて見よう。」

ふるさとも可懐なつかしい、わずかに洋杖ステツキをつくかつかぬに、石磴の真上から、鰻が化けたか、仙人掌サボテンが転んだか、棕櫚しゅろが飛んだか、ものの逞たくましい大きな犬が逆落しに（ううう、わん、わんわん！）そりやこそ出たわ、怯おびえまいか、大工の馬五郎ならざるものも、わツと笑う子供の声も早鐘のごとく胸を打って、横なぐれに、あれは狸坂と聞く、坂の中へ、狸のような色になって、紺飛白こんがすりが飛込んだ。

そのまま突落されたように出た処は、さいわい畜生道でも魔界でもない。賑にぎやかな明あかるい通りで、血ちなまぐさ腥しんいかわりに、おでんの香ぶんが芬ぶんとした。もう一軒、鮫すしの酢が鼻をついた。真中まんなかに鳥居がある。神の名は濫みだりに記すまい……神社の前で、冷たい汗の帽子を脱

いだ。

自動車が来たので、かけ合つた、安い値も、そのままに六本木やがて、赤坂ひのきちよう櫛町へ入つて、溜池ためいけへ出た。道筋はこうなるらしい。……清水谷公園を一廻りに大通を過ぎて番町へ帰つたが、吻ほっとして、浴衣に着換えて、足袋を脱ぐ時、ちよつと肩をすくめて、まず踵かかと、それから、向むこうずね脛を見て苦笑したのは、我ながら呆とぼけている。

けれども、直槓の事は、真面目にお聞きを願う。お聞きになると、あんまり呆とぼけていないのにお心付きになろうかと思う。……さて、以下、直槓から聞いた話を、そのままお伝えするのである。

## 五

二人対坐で、酌人はわざと居なかつた。獅子屋さんは盃さかずきをちよつと控えた。

「——雪の家や、……雪の家というその待合です——

(今日は、ご免下さい。)

あなた方はそうした格子戸を開けて、何と行って声をお掛けになりましたようかしら……おかしな口のきき方です、五月雨つゆどき時の午後四時ごろ、初夏はつなつ真昼まっぴるま間だから、なおおかしい。

土間わきの壁を抜いて、御神燈といいますが、かき入れなしの

磨硝子すりがらすに、鉢から朝顔の葉をあしらつて夕顔に見せた処が、少々歪曲ゆがんで瘦せたから、胡瓜きゅうりに見えます、胡瓜に並んで、野郎が南瓜かぼちやで……ははは。

処へ、すぐ取次に出た女中が……間に合せの小女こおんな。それに向い、改つて、

(小石川白山の小山と申すものですが。)

……どうもおかしい。ここへ来るのに、私は、ご存じと思ひます、二の橋の袂たもとで自動車を下りましたが、三業組合の横町へ、一文字に入れそうもありません。また入れるにした処で、ちと大袈おお裟げさで、近所騒がせだと思ひました。

運転手が深切に、まごつくと不可いけません。先方は、と聞いて、

一つ探険をして参りましょう。探険もまたおかしい。……実は、自宅玄関へ出た私ども家内が、「先途さきは麻布の色町ですよ、」とこの運転手に聞かせたからですが。——「行つていらつしやい。」家内見送りでもつて、昼間の待合行ゆきは余り数を覚えません。勝手に違つたので、一枚着換えたやつが、しからばともいわず、うっかり、帽子の茶系統どころ処を、ひよいと、脱いで、駆出したのがすでおかしいのでございました。

そこで、

(当屋こちらに、間淵まぶちさんのお妹ながれごはおいでになるかね。)

淵が瀬にしろ、流ながれにしろ、そのお妹ながれご、とお聞きになると、何となく色気があります。ところがどうして、胡麻塩ごましおの三分刈、私

より八つばかりも年上の媪ばあさんだから、お察しを願いたい。

——五日以前、暮方です。膳に向つた、電燈を点つけようという処へ、電話が掛かつて、家内が取次に出て、……「小山でございませ、はい、あなたは、はあ、雪の家さん。」どうも雪の家という響き、何、響くほどの広さじゃない。あの手狭ですから、直ぐそこに、馬鹿な……受話器に向つたものの顔も白いように聞えて優しい名だな、と思いますと、はいはい、と受けていましたつけ。

——おわすれかも知れませんが、二十四五年前に、お目に、かかつたきりですが、間淵の妹です。間淵は昨年なくなりました。けれど自分で一度お目にかかりたいと思ひながら、つかがいそびれておりましたところ、このごろ、そちこち、新聞などで、名



前を、写真を、見受けますし、ところも分りましたからちよつとお目にかかりたい。「そういつて……二の橋の、きこえたでしよう、おつな名の待合から。」笑いながら、「大分、婆さんの声、お菜と一緒に、お生憎。」……「分つた、分つた、断つてもらおう。」「いいんですか。」「勿論、久しく煩いまでも可厭いやな言種いぐさだが、とにかくだ、寝ているからおいで下すつても失礼します、いずれそのうち、ご挨拶だ。」……

——あとで、——おだいじにまた折を見ましてで電話を切りましたが、誰方どなた? といつて、家内が聞きます。

その時話した事ですが、さあ、もう十四五年も前だつたらう。

……馳走酒ちそうざけのひどいのをしたたか飲まされ、こいつは活いきがいい

と強いられた、黄肌鮪きはだの刺身にやられたと見えて、家うちへ帰つてから煩つた、思い懸けず……それがまた十何年ぶりかで、ふと出会つた旧ふるい知ちかづ己きで、つい近所だから、と裏長屋へ連込まれた……間淵まぶちがそれだ。——いやそれなんです——

足の短い、胴おとこつまりで肥つた漢子の、みじめなのが抜衣紋ぬきえもんになつて、路地口さかなやの肴屋で、自分の見立てで、その鮪まぐろを刺身に、と誂あつらえ、塩鮭の切身を竹の皮でぶら下げてくれた厚こころざし情あだを仇あだにしては済まないが、ひどい目に逢つたのを覚えているだろう。これが間淵。その漢子の妹だよ、いま電話のかかったのは——と家内に。

が、妹には、逢つたというより見た事があるかないか、それさ

えよく覚えていない。——思い出せば、その酒と鮪の最中、いや、  
 灘なだの生一本を樽からでなくつちや飲めない、といったひと一時代もあ  
 ったが、事、志と違って、当分かくの通り逼迫ひっばくだ。が、何の、  
 これでは済まさない、一つ風かざなみ並なみが直りさえすれば、大連だいにんか、  
 上シャンハイ海ハイか、香ホンコン港コン、新嘉坡シンガポールあたりへ大船でいっばい一艘、積出すつ  
 もりだ、と五十を越したろう、間淵が言います。この「大船で一  
 艘積出す、」というのが若い時からその男の癖だった。話の中に、  
 一人娘は、七八ツの時から、赤坂の芸妓家げいしややへ預けてある、とい  
 ったのも、そういえば記憶おぼえがある。

——亡くなつた、という電話だが、あとさきの様子から待合に  
 縁縁がありそうに思われる。

その節、取りまぎれて、折返しとは行かなかつたけれども、二月とはおかず、間淵の侘住居わびずまいを訪ねたが、もうどこかへ引越しました。行くさきさえ、その辺で聞いても分らなかつた、という始末なのですから。

(電話は聞きながしにしておこう。)

(義理の悪いことはないんですか。)

(言うにや及ぶべき。)

晩酌で、陶然として、そのままひじまくら 枕まくら であうたたねという、のんきさではありません。急ぎの仕事に少し疲れていた時であつたのです。

ところがどうです、その翌日、まだ朝のうち、玄関で早口に饒し

舌<sup>やべ</sup>つている女の声がして、すぐに取次のいゝのを聞くと、年をとつては氣ぜわしい、堪<sup>こたら</sup>え情がなくなつて訪ねて来た。しかじかの口上。起きられぬほどの容体でなければちよつと逢いたい、と昨夜<sup>うべ</sup>の今朝<sup>けさ</sup>で、その間淵の妹が追掛けてやつて来ました。

不精から、面倒くさいというばかり、逢つて差支えはちつともないので、それに白山。——麻布からは大抵の苦勞じやない、勿論断る法はありません。玄関さきの座敷へ通させ、仕事場の小刀をおいて出て逢いました。

(ああ、ああ、さてお久しいことやぞや、お懐しい。)

申しては驕<sup>おご</sup>りの沙汰だが、「ことやぞや」ではお懐しいがられたくない、ところへ、六十近いお婆さんだから、懐しさぶりを露<sup>む</sup>

骨きだしに、火鉢を押して乗出した膝が、襜ひだ 振れの黒袴くろばかま。袖つむぎだか、何だか、地紋のある焦茶の被布を着て、その胡麻塩ごましおです。眉毛のもじやもじやも是非に及ばぬとして、鼻の下に薄髭うすひげが生えて、四五本スクと刎はねたのが、見透みすかされる。——この性格、何とお思いなさいませ。」

——と話した時、小山直植は眉を顰ひそめたのであつた——  
 「……余儀ない次第と申そうか、了見違いと申そうか、やがて、真夜中にこの婆さんを見なければならぬ羽目に立到りました時は、この面相にして、白を着て、黒い被布です、朱あかい袴はを穿はいていたのだから、その不気味さをお察し下さい。

その朝だつて、家内が挨拶に出ようというのを、私が差留めた

ほどでした。

(まことにしばらく、……お珍らしい。)

と、時に、挨拶をするのも上の空で、人様の顔を失礼だが、うっかり見まもっているうちに、吃驚びっくりするように、思い出したのは、私が東京へ出ました当時「魔道伝書」と云う、変怪至極な本の挿画さしえにあつた老婆の容体で、それに何となくそのままなんです。

——「魔道伝書」ようございますか、勿論、板本でなし、例の貸本屋を転々する写本でなく、実にこの婆さんの兄の間淵が秘蔵した、半紙を部厚に横綴よこことじの帳面仕立で。……都合があつて、私と二人で自炊じすいをして、古襦袢ふるじゆばん、ぼろまでを脱ぎ、木綿の帯を半分くずやに裂いて屑屋に売つて、ぽんぽち米を一升炊きした、その時分

はそれほど懇意だったのですが。——また大食いな男で、一升一  
かたけぺろりの勢いきおい。机を売り、火鉢、火箸ひばしから灰を売食といった  
時でも、その「伝書」は手離さなかつた。もつとも渋を刷はいた厚  
紙で嵌はめこみ込おおいの蔽おおいがあつて、それには題して「入船帳いりふね」。紙帳も  
蚊帳もありますか、煎餅蒲団せんべいぶとんを二人で引張りひっぱりながら、むかし雲  
助の昼三話。——学資を十分に取つて、吉原で派手をした、また  
それがための没落ですが、従つて家郷奥能登の田野の豊熟みのり、海山  
の幸を話すにも、その「入船帳」だけは見せなかつた。もうその  
頃から、「大船を一艘いっぱい」が口癖で、ただし時世だけに視野が狭  
い。……香港、新嘉坡といわないで、台湾、旅順へ積出すと言  
います……そこいらの胸算用——計画の覚おぼえだ、と思うから、見る気



の起る筈はずもありません。

間淵は、名さえ洞とうきい齋いといいました。家は祖父うちの代から医師なのを、洞齋本人は法津が目的で、勉強をするのは、能登では間に合わない。おなじ県でも金沢だけにありました専門学校へ通うのに、私の家うちを宿にした。——まかない賄まつき間貸とと称とえる、余り嬉しくもない、すなわちあれです。私との縁はそれなんです。

やがて、間淵が東京へ出て、三年目かに、私も……申すはお恥しい、今もこの通りですが、志を立てて上京した。とつかかり草わ鞋らじを脱いだのが、本郷元町もとまちにあつた間淵の下宿で、「やあ、よく来たね、」は嬉しいけれども、旅にして人の情なさけを知る、となるど、どうしても佻わびしい片山家かたやまがの木賃宿。いや、下宿の三階建の

構かまえだつたのですが、頼む木蔭に冬空の雨が漏つて、洋燈ランプの笠さえ  
 破れている。ほやの亀裂ひびを紙で繕つて、崩れた壁より、もの寂し  
 い。……第一石油の底の方に淀よどんでいる。……そうでしょう、下  
 宿料が月の九つ以上も滞とどつた処だから、みじめな女郎買じやない  
 けれども、油さしも来やしない。旅費のつかい残りで、すぐに石  
 油を買う体て裁いたらく、なけなしの内金で、その夜は珍さらしく肴さかなを見  
 せた、というのが、苦渋いなまり節、一欠片ひとかけら。大根おろしも薄  
 黒い。

が、「今に見たまえ、明日にも大船で一艘台湾へ乗出すよ。」  
 で、すぐにその晩、近所の寄席の色ものへ連出して、中入の茶を  
 飲んで、切端きれっぱしの反古ほごへ駄菓子つまを撮んで、これが目金だ、万世

橋を覚えたまえ、求肥製だ、田舎の祭に飴屋が売ってるのとは撰たちが違う、江戸伝来の本場ものだ。黒くて筋の入ったのは阿蘭陀おらんた煉ねり、一名筏羊羹いかだようかん。おこしを食うのに、ばりばり音を立てなさんな、新造に嫌われる、と世話を焼いて、帰途かえりが、屋台の牛めしです。寢床で話しながら遣やらかそう、と精進揚を買って帰る。易くて腹にたまつていいと云ううちにも、油ものの好きな男で。

——ですから、のちに、私わたくしがその「魔道伝書」のすき見をした時も炬燵こたつやぐら櫓……（下へ行火あんかを入れます）兼帯の机の上に、揚もの竹の皮包みが転がっていました——

そういつた趣で、啖くう事は、豆大福から、すしだ、蕎麦そばだ。天あめどんなぞは驕おごりの沙汰で、辻売のすいとん、どうまた悟りを開いた

か、茶めし、餡<sup>あん</sup>かけ、麦とろに到るまで、食いながら、撮<sup>つま</sup>みながら、その色もの、また講釈、芝居の立見。早手廻しに、もうその年の酉<sup>とり</sup>の市を連れて歩<sup>ある</sup>行いた。従つて、旅費の残りどころか、国を出る時、祖<sup>としより</sup>母が襟にくけ込んだ分までほぐす、羽織も着ものも、脱ぐわ剥<sup>は</sup>ぐわで、暮には下宿を逐<sup>ちくでん</sup>電です。行<sup>ゆきどころ</sup> 処<sup>ところ</sup>がないかと思うと、その頃の東京は、どんな隅にも巢<sup>すす</sup>がありました。裏長屋の九尺二間へ転げ込むのですが、なりふりは煤<sup>すす</sup>はきの手伝といった如法の兩人でも、間淵洞齋がまた声の尻上りなのさえ歯切れよく聞える弁舌<sup>さわやか</sup>爽<sup>さわやか</sup>で、しかも二十前<sup>はたち</sup>に総持寺へ参禅した、という度胸<sup>あぐら</sup>胡坐<sup>あぐら</sup>で、人を食っているのですから、喝<sup>かつ</sup>、衣類調度の類<sup>たぐい</sup>、黄金<sup>きん</sup>の茶釜、蒔<sup>まきえ</sup>絵<sup>え</sup>の盥<sup>たらい</sup>などは、おツつけ故郷<sup>くに</sup>から女房が、大船で

いっばい  
一 艘、両国橋に積込むと、こんな時は、安房上総あわかずさの住人になつて饒舌しゃべるから、気のいい差配は、七輪や鍋なべなんぞ、当分は貸したものです。

おかちまち  
徒士町

の路地裏に居ました時で。……京では堂宮の絵馬を見

ても一日暮せるといふ話を聞きます。下谷のあの辺には古道具屋

が多いので、私は希望のぞみが希望だったから、二長町にちようまちや柳盛座の芝

居の看板の前には立ちません、若い時だから寒さには強い。ぶら

ぶら何を見て歩行あるしていたかは、ご想像に任せますが、空腹すきばらの

目を窺くぼまして長屋へ帰ると、二時すぎ。間淵は見えないで、その

煎餅蒲団のかかった机の上に、入船帳の蔽おおいを抜けて、横綴の表紙

が前申した、「魔道伝書」、題ばかりでも、黙って見たままで居

られますか。いきなり開けた処に、変な、可訝おかしな、絵があつたのです。

若い、優しい女が裸体、いや、裸体じゃないが、縁の柱に縛られた、それまでのかわい抵抗、悩乱しんらんが思われる。帯も扱しご帯もずり落ちて、絡まつつた裳すそも糸のように捌からんだばかり。腹部を長くふつくりと、襟すべの辻すべつた、柔かい両の肩、その白さ滑かさというものは、古ぼけた紙に、ふわりと浮く。……

が、もう断念あきらめたのか、半ば氣を失つたのか、いささかも焦しやう躁そう苦悶くもんの面影がない。弱々と肩にもたせた、美しい鼻筋を。

……口かすかを幽かすかに白齒を見せ、目を睜みひらいたまま恍うつ惚としている。

それを、上目づかいの頤あごで下から睨ねめ上げ、薄うす笑わらいをしている

老婆ぼばあがある、家造やづくりが茅葺かやぶきですから、勿論、遣手やりてが責めるので  
 はない、姑しゅうとが虐とげるのでもない。安達ヶ原しるしでない証しるしには、出刃しも  
 焼火箸やけひばしも持つていない、渋団扇しぶうちわで松葉いぶを燻いぶしていません。た  
 だ黒い瓶かめを一具、尻まからげで坐まつた腰巻こしに引きつけて、竹篋たけべらで  
 真黒まつくろな液体まらしいものを練取ねつていのですが、粘ねば々ねばとして  
 見える。

老婆ぼばあは白髪しらの上がの処がに、

(ようゆうばば術じゆつを施せすのところ)

おかしな口調くちうです——(術じゆつを施せすのところ) 老婆ぼばあはたちまち見  
 て取とつた。絵えも覲てきめん面めんだから解ときました。が、その(ようゆう)  
 が分わりません、かなで書かいただけで、それは三十年余たりも経たつた、

いまにおいてどういう意味だかわかりません。が……さて続いた  
 絵なんです、もつとも、めくるとすぐに細かい字で、ぎつしり二  
 三枚かき込んでありましたけれども、川柳にもありましよう、う  
 まい事をいった、（読本は絵のところが出て子に取られ）少年は  
 きれいな婦おんなの容易やすならぬ身の上が案じられますから、あとを性せ  
 急つかちに開ける、とどうです。

立った乱れ姿で縛られたのが、今度は崩れたように腰をついて、  
 膝を折りががめに、片足を、ぐつたりと、濡縁に髪を流し、白く  
 蹴出した、その一本のふくら脛はぎの膝から下に、むくむくと犬だか  
 猫だか浅間しい毛が生えて、まだ女のままでの指ゆびさき尖けものが獣の鱗爪ひづめに  
 屈かがまって縮んでゐる。



——（ようゆう）ですね、老婆ばばあは、今度は竹篋を口に啣くわえて、片手で瓶の蓋ふたをおさえ、片手で「封」という紙きれを、蓋の合せ目へ禁おしながら、ニヤリとしている。

その、老婆ばばあに、形も面も、どことなく肖にているのですよ。唯今お話をしました、——二の橋の待合から電話を掛け、当分病気だといつて断つたのに、すぐに翌日、白山の私宅へ来た。——

「——お懐しい。」と袴の膝を不遠慮に突きつけた、被布で胡麻塩の間淵の妹。

ちよつとお待ち下さい。

「うう、うううう、おお、おお、苦しい。」

だしぬけに目の前の廁かわやで、うめく声がすると、ぼったり戸を開けて出たのが間淵で、——こんがらかると不可いけません。——兄洞齋せうです。

私わたくしがその魔道伝書を覗のぞいているのを見ると、

「や、いつ帰かえった。」

というが早はやいか、引手繰ひつたくるや否いなや、肥ふとっているから、はだかつた胸むねへ腋わきの下したまで突つっこ込んだ、もじやもじやした胸毛むねげも、腋毛わきげも、うつくしい、情なさけない、浅間あさなしい、可哀かわいそう相あひなな婦おんなを揉もみくたにして、捻ねじこ込んだように見えて、毛けの生なえた方も、白しろい方も、そのままま瞼まぶたにちらついて、覚えています。私は、ぱちぱちと瞬またたきした。

「飛とんでもない、こりや見せるもんじやない、いや、見るもんじ

やない。第一若いものが見ては大変だ……」

酷ひどく腹が痛んで、私の帰ったのが夢中で分らなかつたから、うっかりした折からだそうで。……しぶえんどう 渋豌豆の堅いやつを、自分で持つて行つて、無理に頼んで、うどん粉をこつてりと、揚物にさしたという、それに中あてられたんです。

なかなか、絵も二枚や三枚じゃない、ずツしり分厚つづりこに綴つづりこ込んだ一冊で、どんな事が書いてあるか知れませんが。冒險的にも見たかつたのでありますが、牛若ほどの器量がないから、魔道妖異の三略には、それきり、手を触れる事が出来なかつた。

## 六

「なあ、それにしても、ほんにほんに久しいものやて、にい……」  
さて、袴を穿いた婆さんはいうのです。巻まきたばこ 蓼れうを吹かします  
が、取出すのが、持頃の呉ご紹しょうらしい信玄袋で、どうも色合といい、  
こいつが黒い瓶かめに見えてならなかった。……

「あの時分」……

自分で尼、尼という、襟に大形の輪数珠も掛けていましたが、  
容体みこが巫女にも似て、両部も三部も合体らしい。……「尼ども、  
両親はどうになくなって、もともと身しんしょう上じやうの足りぬ処を、洞齋  
兄の学資といえ、姉の嫁わし、私あによめには嫂せうじやにい、その里方から末  
を見込んで貢いでおった処を、あの始末で、里をはじめ、親類も

あいそを尽かせば、あね 嫂も断念あきらめた。それやで、に、嫂の里へ引取  
つて養うてくれておつた尼を連れて、東京へ、徒士町の長屋へ出  
向いたというものは、嫂は縁切り、尼はまたこの広い世界へ棄て  
られた。島流し同様のものやつたが、にい——

人間の侘わびしい住居すまいというより、何やら、むさくるしい巢のよう  
な裡なかから、あんたは、小僧に——」

そうです。千駄木の師匠、雲原明流氏の内へ、縁あつて弟子小  
僧に住込みました。

これは申すまでもありません。

「洞齋の兄の身にして見ればじや、にい、この妹をつれて、女房  
が上京するといえばや、当分だけなど、くらしをつける銭金の用

意をされていて、一緒に世帯をするものと思うたのが、そのしだら魂胆や。つら当にも、その場からでも、妹を奉公させる……また奉公もせんならん。翌あくるひ日ひが日の糧にも困った、あの逼迫ひっぱくやよつてに、すぐに口を見つけて、にい、わすれもせんぞに——あんたはその千駄木へ。尼は、四谷へ、南と、北へ。……一日違いで、徒士町から分れたというもんじや。地方いなかで結うたなり、船や汽車で、長いこと、よう撫なでつけもせなんだれど、これでも島田齧がやつたが、にい。」

私は顔を見た。

「覚えておいでますかにい——ちよつとの間やったけれど、おなごりが惜しかったぞ。北と南へ。」

どつちが北だか、南だか、方角に途迷とまどいしたが、とにかく分れたのは難ありがた有かつた、と思ひました。……それに、言いわるれば、白おしろい粉こなをごつてり塗つけた、骨組の頑丈な嫂あねというのには覚えはあ  
るが、この、島田鬻うには、ありそうな記憶が少しもない。

「命さえあれば、にい、どこでどう、めぐり逢わんとも限らんも  
んや。したが、尼も、この奉公を振出しに、それは、それは太いか  
こと、苦勞辛あ苦くをしたもんや。」

ここで、長々と身の上話が始まった。が、くどいから略しま  
しよう。あり来きたりの事ことで、亭主が三度かわつた事ことだの、姑と小しゅうとせゆう  
姑とに虐いじめられた事ことだの、井戸川へ身を投げようとした事ことだの、

最後に、浅間山の噴火口に立って、奥能登の故郷の方に向つて手

を合わせて、いまわという時、立騰たちあがる地獄くろけむりの黒煙くろけむりが、線香の脈となつて、磊々らいらいたる熔岩もくさが艾もぐさの形に變じた、といひます。

ちよつとどうも驚かされた。かねて信心渴仰の大、大師、弘法様が幻まぼろしに影向ようごうあつた。灸きゆうてん点てんの法を、その以心伝教で会得した。一念開悟、生命の活法を獲受して、以来、その法をもつて、遍あまねく諸人しよにんに施して、万病を治するに一点の過誤がない。世には、諸仏、開祖の夢想の灸とと称となる療術やからの輩やからは多いけれども。

「尼のに限つては、示現の灸じゃ。」

「——成程。」

「……昨宵も電話でのお話やが、何やら、ご病気そうなが、どんな容体や。」



「胃腸ですよ、いわゆる坐業いじよくで食っていますから、昨夜ゆうべなどは、きりきり疼いたんで。」

「いずれ、運動不足や、そりやようないに。が、けど何でもない事や。肋膜ろくまく、肺炎、腹膜炎、神経痛、胸の病、腹、手足の病氣、重い、軽い、それに応じて、施術の法があつて、近頃は医法の科学的にも、灸点を認めているのやが、その医法をも超越して、

（時々むずかしい事をいいます。）氣違が何や……癩らいでも治るがに。胃腸などはそりやに、お茶の子じやぞ。すぐに一灸で、けろりとする。……腹を出しなされ、は、は、は、これでもあんだ、島田鬻なしみやて、昔馴染なしみには。」

「ま、ま。」

「療治の用具もちゃんと揃えて持合わせておる、に。」

「まあ、まあ。」

「熱いと思うてかに、熱い……灸やから。は、は、は。微塵<sup>みじん</sup>も、そりやない。それこそ弘法様示現の術や、ただむずむずとするばかり。」

「まあ、しかし。」

「ただ、あんたのものを使うというては、火鉢の火を線香に取るばっかりや。」

弱った。

「それやかとても、火道具はちやんとここに持つておるがや、燐<sup>マ</sup>寸<sup>ツチ</sup>などは使わんど、艾<sup>もぐさ</sup>にうつす附木<sup>つけぎ</sup>には、浅間山秘密な場所の硫

黄が使うてあるほどに。」

なお弱った。

「どうも、灸だけは……ですよ。」

「お嫌いかに。」

「嫌いにも、なにも。」

「好嫌いは言うておられんぞに、薬には。それやし、何せい、弘法様の……あんたお宗旨は。」

「ほっけです。」

「堅けん法ぽっけ華、それで頑固や。」

「いや、いやそんな事より、なくなつた母親の遺言です、灸は……」

……」

「その癖、すえられなさる様な事が沢山あるやろ、は、は、は、  
これでも昔は島田齧や。」

と口を開けて、それでも皮肉ではなさそうに笑った。

「時に、洞齋さんは、何の病気で。」

と聞くと、

「中気でに、四年越。」

私も、何も、皮肉でいったのではなかった、気違も、癩さえ治すというのに対して。——しかし四年越、中気でなくなった事をいつてからは、おかしく、急に陰気になって、帰支度をする。蒸しものの菓子を紙に包んで、ちよつと頂いた処は慇懃いんぎんで却つて恐縮。納めた袋の緒を占めるのが兜かぶとを取つたようおごそかで、巖いんぎんに居直つ

て、正午頃ひるごろまでに、見舞う約束が一軒。さて、とる年だし、思い立った時に逢つて見たいのを、逢つて見ぬと、いつまたお目にかかれようと、それゆえにこそ、といつて起たつた時には、すこしばかり妙な寂しい気がしたのです。

人情ですか、争えない、それもあります。それに、自動車でなくつては運ばれない。嵩張かさばつた手土産がありました。

「義理さえ欠けなければ。」

とあとでいう家内の言ことばについては、使で礼を返しても、その義理は欠けなかつたが——逢つて見たい時に逢つておかぬと、いつまたお目に掛かれるか——まだ仕事場へ帰らない——送出して取つて返し、吸いかけの巻まきたばこ 苳つまをまた撮つんで、菓子盆を前に卵うの花

のなよなよと白いのを見ながら、いま帰った尼巫女あまみこの居どころを、石燈籠のない庭越に、ほのかに思いうかべました。待合、雪の家。  
 姪めいに当る、赤坂に芸妓げいしやをしていると、いつか聞いたのが、早く旦那なるものにひかされたか、事情はとにかく、心づもり二十はたちそこいらで、まだ、若い。

この後見なり、客のとりまわし、家のきりもりをしていると思われる、その母親があるのです。妹ぐるみ打棄うっちゃった、……いや間淵洞齋が打棄られた女房の、後あと二度目の女房なのです。後添のちぞい、後妻、二度目の嫁といつても、何となく古女房のように聞えますが、どうして、間淵と夫婦になった年が、まだ、ほんの十五六。で、ただ一度だけ、その頃、私が、本所で逢った事がある。……

師匠明流なさけの情で、弟子小僧に、住込んだ翌年の五月です。花時に忙がしい事があつて用が立込んだかわりに、一日お暇が出て、小遣こづかいを頂いた。師匠は大家でも弟子は小僧だ、腰の煙草たばこいれ入にその銀貨を一枚「江戸あるき」とかい虫の食った本を一冊。当日は本所の五百羅漢へゆくつもりで、本郷通りを真すぐに切通し、寄席の求肥の、めがねへ出ました。すたすたもので、あれから、柳原を両国まで、鉄道馬車で、あとはまた大歩ある行きに歩行くつもりの、ところが、馬車を下りる時、料金を払おうとする、と、落したのか、すられたのか、煙草入がありません。小遣ぐるみ。あつと慌てたが、それだけじゃ済まない。広小路のあの群集の中で、しよぼしよぼと監督の前へ出されたのですが、突出したとは言い

ますまい。連れてつた瘦やせた車掌がいい男で、確たしかに煙草入を——洋服の腰へ手を当てて仕方をして——見たから無た銭だのりではありません。掏すられたのです。よろしい、と肥おつた監督おおきが大かくしな衣兜へ手を突つ込んで、のみ込んでくれました。

羅漢たちの中には、苦しい断食の業を積んだのがありましよう、思おつただけでも足がすくむ。ありようは五百体より一杯をあてにした、蕎麦そばも、ちらしも、大道の餅も頬張れない。……それ以上に弱よつたのは煙草が飲めない。参さんけい詣いはしましたが、亀井戸の境内で、人間こうなると、目が眩くらみます、藤の花が咲いていたか、まだだったか、それさえも覚えていません。

太鼓橋の池のまわりの日当りの石に、順礼の夫婦が休んでいて、



どうでしょう、女房が一服のんでいて、継ぎはぎだが紅あかいところの見える、襦じゆばん袢ばんの袖で、

「アイ」

あいと脚きやはん絆はんの膝をよじつて、胸を、くの字なりに出した吸付煙草。亭主が、ふつかりと吸います、その甘味うまそうな事というものは。……

余計にがつがつして、息を切つて萩寺の方へ出たでしょうか、真ま暗くら三さん方ぼうという形、かねて転居さきを端書で知っていました、曳ひき船ふね通どおりの間淵うちの家に辿たどり着いた。ここで一ひと片かた餉けありつこうし、煙草錢の工面をつけようと思いましたが。ところがどうです。

——その時分の事で、まだ藁わら茸ぶきの古家で、卯の花の咲いた、木

戸がありました。柱に、「東海会社仮事務所」と出ていて、例の大船でいっばい一艘積出す男は、火のない瀬戸の欠火鉢を傍わきに、こわれた脇きょうそく息びろうどの天鵝絨ひきはがを引剥ひきはがしたような小机によっかかって、あの入船帳ひじに脇ひじについて、それでも莞爾にこにこ々々している……

「これ、お茶をよ。」

と破やぶれぶすま襖あはせの次の間へ。

「何だ、焼芋、蕎麦、ごもく、豆大福、えんどう豌豆えんどうの入った——うふ、うふ、うふ。」

と尻上りの冴えた声で、笑わらいを肥ふとった腹はらへ揺ゆすった。

「鼠が貿易をしはしまいしよ、そんなものを積んで大海を渡れるものか。その了見だと、折角あれだけの名家の弟子になりながら、

小刀で蟻を刻んでいやしないかね。

蕪かぶにくつつけてさ、それ、大かぶにありつく、とか云つて、買手が喜ぶものだそうだ。いや、これは串じょうだん戯わよ。船はちやんころでも炭薪すみまきや積みぬというのが唄にもある。こんな小さな家うちだつて、これは譬たとえば、電気ほたんの釘ひねだ。捻ひねる、押すか、一たび指が動けば、横浜、神戸から大船いっばいが一艘、波を切つて煙を噴はくんだ。喝かっ！」

と大きな口をあけながら、目を細く、頻しきりに次の間を頤あごで教えて、目顔で知らせて、

「お茶を早くよ。」

貧しい盆に茶碗をのせて、気候は、そんななのに、もう白地の

浴衣です。髪だけは艶々つやつやと島田に結っていました。色の白い吃く驚つくりするほど人柄な、その若いのが、ぽつと色を染めて、黙って手をついた頸脚えりあしが美しい。

「きみ、小山、今度の妻だよ。」

その時、ついた手が白く震えた。

「冬というよ、お冬です。こりや親しい同県人だ。——お初に、  
といわないかね。」

「お初に。」

といった時、耳まで紅あかく染まった。それなり襖の影へ消えました。私は一息すきつぱらに空腹へ飲んだのですが、それは茶ではないのです。冷水に、ちらちらと白いものが浮かしてある、香煎こうせんは色があり

ましよう、あれか、菓子種か、と思ったのが、何と、志は甘か  
った、が、卵の花が浮かしてあつたんです。毒にはなりません、  
何事もなかった処を見ると、枸杞くこの花だったかも知れません、白  
く、細かくて、枸杞は薬だといえますから。

そうと知ったら、言いますまいものを。……水は、実は途中で、  
三度ぐらい飲んでいましたから、東海会社社長の顔を見ると齊ひと  
く、息が切れる、茶を一杯、といつて、それから焼芋、蕎麦、大  
福の謎を掛けた。申すまでもなく煙草入をなくした顛てんまつ末しやべを饒舌  
つてからですが、これに対する社長の応対は、ただ今お聞かせ申  
した通り。

湯を沸わかす炭もなく、茶も切れていたのです。年も二十以上違つ

ている。どうしてこんな細君を。いや、あの、片時へんじも手離さない  
 「魔道伝書」を見るがいい。お冬さん、上品な、妍美かおよい娘は、魔法に、掛けられたものでしょう。

千駄木へ帰ってから、師匠に鉄道馬車の監督の話をする、気に入った。その寛容と深切に対しても、等閑なおよりに棄てては置けない、料金は翌日にも持参しなさい。で、二日ばかりおいて、両国

まで、その持参です。……なくなしたお小遣の分まで恵与に預る。

……余程よっぽど曳船へ廻りたかった。堅豌豆ぬきの精進揚か、いや、

そんなものは東海会社社長の船には積むまい。豆大福、金鰐きんつばか。

それは新夫人の、あの縹緞きりように憚はばかる……麻地野、鹿の子は独り合

点か、しぐれといえ、五月頃。さて幾代餅いくよもちはどこにあらう。

卯の花の礼心には、砧きぬたまき、紅梅餅、と思つただけで、広小路へ  
 さえ急いそぎあし足、そんな暇は貰えなかつたから訪ねる事が出来な  
 かつた。

盆やすみに、今日こそと、曳船へ参りましたが、心当りの卯の  
 花垣は取払われて、窪んだ空地に、氷屋の店が出ていました。：  
 ：水溜りに早咲の菘が二つ三つ。

そういつたわけで、それきりになつたのですが、あと十何年、  
 不意に、また間淵洞齋に出会つて、悪わるざけ酒にあてられた事を申し  
 ました。――

それは、白山の家うちを出て、入費のかからない点、屈くつきょう竟ようばか  
 りでなく、間近な遊山ゆざんといつてもいい、植物園へ行つて、あれか

ら戸崎町の有名な豆腐地蔵へ参ろうと、御殿町へ上ると、樹林  
ひとかまえ 一構、奥深い邸の門に貼札が見えたのです——鷺流狂言、  
かいこう 開興。入場歓迎。——日づけが当日、その日です。時間もちよ  
うどでありました。

舞台では、もう「宗八」というのがはじまっていたのですが、  
広書院の一方を青竹で劃くぎっただけが、その舞台で、見物席は三十  
畳ばかりに、さあ十四五人も居ましたか、野分のあとの庭の飛石  
といった形で、ひっそり、気の抜けたように、わるく寂しい。

例の、坊さんが、出来心で料理人になって、角頭巾すみずきん、黒長  
ごろも 衣まないた。と、俎なに向つた処——鮒ふなと鯛たいのつくりものに庖丁を構えた  
ばかりで、鱗うろこを、ふき、魚頭を、がりり、というだけを、咄どもる、



あせる、狼狽うろたえる、胴忘れをしてとぼん、としている。

海いるか豚が陸おかへ上った恰好かつこうです。

仕切の竹で、これと向合い、まばらな見物の先頭まえがわに、ぐんなりした懐手で、悄しおれた鱭ひれのように袖をすぼめていた、唐棧柄とうざんがらの羽織で、黒い前垂まえだれをした、ぶくりとした男が、舞台上で目を白くする絶句に後退あとずさりをしながら振返ったのが、私に気がつく、そのまま……熟じっと視みた。

開演中です。居膝いざるように、密そつと傍そばへ寄つて来て、

「小山じゃないか。」

「おお。」

「出ようよ、静しずかに。」

ひきしお  
 引汐ひきしおに会場を出たのです。

「——何、植物園から豆腐地蔵、不如しかず、菘菘閻魔こんにやくえんまにさ。煮込

んでも、味噌をつけても、浮世はその事だよ。俺もこの頃じゃ、  
 大船いっばい一艘、綾あやにしき錦にしきでないまでも、加賀絹、能登羽二重という

処を、船も、びいどろにして、金魚じゃないが、紅あか、白、ひらひ  
 らとした処を、上シャンハイ海ハイあたりへ積出すほどの決心だ。一船のせ

よう。あいかかわらず女の出来ない精進男に、すじか、竹輪か、こ  
 っ तरीとした処を食わせたい。いや串じょうだん戲だんはよして、内は柳やなぎ

ちよう  
 町ちよう、菘菘閻魔のすぐ傍わきだ。」

魚頭をつぎ、鱗をふく（宗八の言にありますね。）私窩じごく子でも

やつてるのじやないか、と思った。風<sup>ふう</sup>がまた似ていました。柳町の裏長屋で……魚頭も鱗もない、黄肌<sup>きはだ</sup>鮪に弱った事は、——前<sup>さき</sup>刻<sup>き</sup>に言つた通りです。

その黄肌鮪<sup>びんなが</sup>だか、鬢<sup>びん</sup>長鮪<sup>なが</sup>だかと一緒に、悪酒を、なめ、なめ、「あいかかわらず、この体<sup>てい</sup>だ、といううちにも、一昨<sup>さき</sup>々<sup>おと</sup>年<sup>とし</sup>までは、台湾<sup>たいわん</sup>に一艘<sup>いっぱい</sup>帆<sup>はん</sup>を揚げていたんだよ。ところが土地の大有力者が、妻に横恋慕をしたと思いたまえ。それのかなわな腹<sup>はら</sup>癒<sup>い</sup>せ<sup>せ</sup>に、商会对する非常な妨害から蹉<sup>さ</sup>跌<sup>てつ</sup>没落<sup>ぼつらく</sup>さ。ただ妻の容<sup>きり</sup>色<sup>よう</sup>を、台北の雪だ、「雪」だ<sup>と</sup>称<sup>と</sup>え<sup>な</sup>られたのを思出<sup>し</sup>にして落城<sup>らくじやう</sup>さ。」

と、羽織を脱ぐと、縞<sup>しま</sup>の女<sup>おんな</sup>衣<sup>もの</sup>の、振<sup>ふり</sup>が紅<sup>あか</sup>い。ニヤリとしながら、

「お冬、お冬、珍らしい男を連れて来たぞ。誰だ分るか、分るまい。」

薄暗そうな次の間で、人むかえの起居たちいの気配が、と寂然ひっそりやむと、

「お声で分りました。いらっしやるなり。……小山さんです。」  
間淵が菟蕪のような色をして、懐手の貧乏ゆすりで、

「酒だ、酒だ、酒を早く。」

人間どう間違えても、自惚うぬぼれのないものはないとか言います……  
……少くとも私は……人として、一生に一度ぐらいは惚れられる。

無理な酒もすごしました。しかし、帰るまで、それつきり、お冬さんは、顔も姿も見せなかった。

——先に曳船通、のちに柳町の、そのお冬さん、今は二の橋辺の待合雪の家に居るらしい——白山を訪ねた尼の帰ったあとで、私は、庭の卯の花を見ながら、江戸の名画の雪景色を可懐なつかしく思つたことは、いうまでもありません。

——お聞き下さるようだから続を話しましょう。——

ところで、その雪の家の胡瓜形きゅうりがたの磨硝子すりガラスの掛かかつた土間に立つてから、久しくお待たせいたしました。

が、しかし待っていたのは、お聞き下さる、あなたではない、私です。南瓜かぼちゃです。は、は、は。

が、待つ間はなかつたのです。小女がすぐに引返し、取次いで二階の六畳——八畳づまりですか……それへ通した。

真まんなか中に例の卓ちゃぶだい子台。で欄間に三枚つづぎの錦にしきえ画が額にし  
 て掛けてある。優ゆうえん婉、娜だれい麗、白はくじ膩、皓こうたい体、乳も胸も、滑かに  
 濡々として、まつわる緋ひぢりめん縮緬、流れる水浅黄、誰も知った――  
 歌麿の蚤あま女一集の姿。ふと、びいどろの船に、紅あかだの白だのひら  
 ひらするのを積むといった、間淵洞斎の言を思い出した。……い  
 っては、あれだけの絵えかき師に相済まないが、かかっているのは第何  
 板、幾度かえして刷ったものだから、線も太ければ、勿論厚肉で、  
 絵具も際どいのお察し下さるように。いずれ二三人よんでお附  
 合に一杯、という心づもり。もつとも家内の心づけ、出いず入いらず  
 に、なにがしの商品切手というのを、水引で袱ふくさ紗で懷ふところ中にして、  
 まじまじ、そこに控えている年配の男をついでにお察し下さるよ

うに——

で、酌人は酌人、ひらひらか、ちらちら、として、さてお肴さかなが、何分刺身はあやまる。……菑蕪、菑蕪がいい。おでんとしよ  
うと、柳町の事を思いながら一方を見ると、歌麿の蜚女と向合つ  
て「発菩提心ほつぼだいしん。」という横額かかが掛っている。

亡くなつた洞齋が遣りそうな好みだ、と思うと、床の間の置物  
が鼻の穴の目立つて大きい、真黒な土の達磨だるま。

花活はないきに……菑蒲あやめにしては葉が細い。優しい白い杜若かきつばた、そ  
れに姫百合、その床の掛物かぶつに松子を描いた、楽書らくがき同然の、また  
悪く筆意を見せて毛を刎はねた上に、「喝。」と太筆が一字睨にらんで  
いる。杜若、姫百合の、およそ花にも恥じよ、「喝。」何たるも

のぞ、これだから、私は禅が。……

はてな、雪の家の、ここの旦那なるものが変に「喝。」がった  
難物かも計られぬ。……

「ああ、はじめまして、あなたが間淵さんの、お娘ご。」

そこへ、一枚着換えた風俗ふうぶくで、きちんとして、茶を持ってきた  
のが、むかし、曳船で見たお冬さんに肖そっくり如……といううちにも、  
家業柄に似ず顔を紅うした。そうして私の顔を視みると、ちよつと  
曇ひそらせたような眉が、お冬さんより、顰ひそんだ形なりに迫っています。  
お母つかさんは、目鼻だちがぱらりとしていたのです。

時宜挨拶がちよつと交されました。

「お父さんは、」



中氣、とも言いかねて、

「久しくお煩いだつたそうですね。」

「ええ、四年越……」

「それはそれは、何よりご看病が大変でしたね。で、甚だ何ですが、おなくなりになすつたのは、此家こちちで。」

「はあ、あの病氣おこしの発おこりましたのは内だつたんですけれど、こんな稼業からだでしょう、少しは身体からだを動かしてもいいと、お医師いしやがおつしやいましてから、すぐ川崎の方へ……あの、知合の家うちが広ひろうございますもんですから、その離室はなれのような処へ移うつりましたんですの。」

——喝旦那すまいの住居すまいらしい……とするとお冬さんは、そつちで暮

してはいはしないか。逢えない仕儀であろうも知れない。——またお察しを願うとして——実は逢いたかった。もつとも白山へ来訪をうけた尼刀とじ自へ返礼に出向でむかいたいののに、いつわりはないのですが、そんな事はどうでもいい。また妙に、その尼にも、いま差当つて娘にも、お冬さんの消息が、さそくに口へ出なかつた、そのわけは、前述の「魔道伝書」を見ない方には、お解りになりますまい。怪しからん事であります。

「何にしましても病気が病気だもんですから、あせりにあせり抜いて、氣ばかり荒くなりましてね、傍はたを困らせ抜きますうちにも、あの病気に限つて、食べものの難題ですの。ええ、一番困りましたのは毎日見ます新聞の料理案内と、それにラジオのご馳走の放

送ですよ。鴨、鳥はいいとして、山鳥、雉子、豚でも牛でも、野菜よし、魚よし、料理に手のかかったものを、見ると、聞くと、そのまんま、すぐ食わせろ、目の前へ並べろでもって、口が利けましただけになお不可ません、少しも堪忍をする気はなし、その場即座について、間に合わないと、殺すか、ほし殺せなんですもの……どんなに母を泣かせたでしょう、小父様。」……

私は吐胸とむねをつきました。どんな意味でも、この場合の「おじさま。」は身に応えた。今度はこつちが赤面して汗になった。

「魔法でもつかわないじゃ、そんな事は出来ません。」

その際、秘伝書を手に入れようという、深き慮おもんばかりがあるものなら、もつと辛抱をしたでしょう。せき心で、お母さんつかはと、初めて聞

くと、少々加減が悪くつて、というんです。川崎とすればもとよりの事、この家やに居た処で、病気だといえば……と思うも遅い。既に「おじさま。」と聞いた時、もう私は居たたまらなくなつたのです。

発菩提心！……向むかいあ合あつた欄干レイドロの硝子ビイドロの船に乗つた美女の中には、当世に仕立てたらば、そのお冬さんに似たのがたしかに。ああ発菩提心！……額の下へ、もそもそ不手際に、件くだんの紅白水引を、端づくろいに、ぴんと反そらして差置いて、すぐに座を開くと、  
「まあ、おじさま。」

いかにも案外と、本意ほんいない様子で、近所へ療治を頼まれて行つている、いまにも帰るでしょう。姨おばがという。尼刀自の事です。

お顔を見たら、どんなに喜ぶか知れません。女中も迎いに申しました。ちよつと様子を、と襖ふすまを抜けるように、白足袋で、裾すそを紅べ入にいりに二階を下りた。

間数もなさそうですが、居いな馴染なじまない場所は、東西、見当が分らない。十番はどつちへあたるか、二の橋の方は、と思うと、すぐ前を通るらしい豆腐屋の声も間遠に聞え、窓の障子に、日が映さすともなく、翳かげるともなく、漠ぼうとして、妙に内うち外そとが寂ひっそり然する。ジインと鉄瓶の湯の沸く音がどこか下の方に静しずかに聞え、ざぶんと下屋げやの縁側らしい処で、手水鉢ちようずばちの水をかえす音が聞える。いい年増、もう三十七八になろうかしら、お冬さんが寢床を起きて出たのではないか、こんな時、廁かわやのあたりに、けはいがするとい

ものは、何だか、人影が幻に立つような気がするものです。

喝！ ああ驚いた。掛けものめ。

「あつ！ ははは。」

いきなり、男のように笑いかけて、

「驚かそう<sup>おど</sup>思うて、わざと、こつそりと上つて来たぞに。心易立てや。ようこそに、ようこそに、こんな処まで、嬉しいこつちや。

や、もう洞齋兄の事や、何の事や、すぎ去つた。そんな挨拶はさ  
らりとおくこつちや、にい。縁あればこそ、生あればこそ、北と  
南と、何十年分れたものが訪<sup>と</sup>いつ訪われつ、やぞに。それに、そ  
ういう行儀は何じや、袴<sup>はかま</sup>はいたり、膝にお手々をちやんとついた  
り、早や、その手をぬいと伸ばいて、盃を持つ格好に、のう。」

人に口は利かせない。被布から皺しなびた腕を伸ばして、目八分に、猪口ちよこをあける指形で、

「何とかいうたに、それ、それ、乾盃、あれに限るぞに、いい事じゃ。洞齋兄は沢山たんとは飲まなんだけれど、島田齧の妹は少し飲やるがやぞ。これでもに、古馴染や、遠慮はない。それにどこへ来なされた思うて、そのように堅うして。……花柳界、看板を出した待合や。さ膝を崩いて、楽にござつて、尼かてこの年、男も同然、胡坐あくらを搔いても人は沙汰せん。それに袴はいとるぞに。」

また高笑いで、

「……そこで念のため云うておくのですが、内証話をあけすけなが、あんたも世間が解つておいでや。寸法とかいうもんで、ここ

へ来ての以上、一口、酒となれば、芸妓げいしやも呼んでやろう、それ、ちやんとその了りようけん簡かんは見えてある。なれど、それはさせんぞ。今日だけは、こちらへ万事まかせてくんされ、別懇のお附合や。そのかわり、わざと芸妓は呼ばん。尼がお対手あいてして、姪めいがお酌しやくやて、辛抱ものや。その辛抱ついでにな、お肴さかなもありあわせやぞに。惣菜そうさいさながらの。」

「いよいよ口を利かせません。立つにも立たれはしないから、しばらく腰を据える覚悟をしました。が、何分にも、餒あぎれた黄肌きはだ鮪たうびんながおそろ鬢びん長鮪ながたうが可恐おそろしい。」

「菫こん 蕪やく。」

「こんにやく。」



口の裡うちでむぐむぐ言ったのが耳へ入ったか、聞返されて、驚いて、

「卯の花なぞが結構です。」

また、うっかり、下の縁側を卯の花が、葉を搦からんだ白い脚が、寝衣ねまきの裳すそを曳ひいて寝みだれ姿で寢床からと……その様子が、自分勝手の胸にあつた。ただし、他家よそさま様のお惣菜を、豆腐うのはな殻、は失礼だ。

「たとえばです。」

「お好きか、なんぼなど、内で間に合う、言いつけようでに。さ、もう、用意はしておつたが、お爛かんの望みは熱いのか、ぬるいのか、何せい、程のいい処。……もう出来たろうに、何しとるぞ。」

と、手をたたく。

「はい。」

返事は下でお極きまりの、それは小女か女中かで、銚ちようし子さか、盃かずき、添ちやぶだいえものは、襖が開いて、姪——間淵の娘の手で、もう卓ちやぶだい子台だいに並んだのでありました。

さて、お盃。なかなか飲める。……柳町で悩まされた子ぼう子ふらが酔いそうなものではなかった。

「お孝こう、お孝。」

と若いかみさんの、姪を呼んで、

「重ねて、それ、お酌をせんかの。……何をぼんやり……あんたの顔を見とるがや。……電燈もつけて。」

その燈あかりに、お孝が、……若いかみさんの飲まない顔が、何故か、耳元まで紅かつたのです。

「これがほんの水入らず、にいい。そういえば、お対手あいては、姪、尼でもや、酒だけは黒松の、それも生一本やで、何と、この上の町、ここでの名所、一本松というてもいいやろ。」

と尼刀自しが洒落しゃれた。が、この洒落しゃは悪にくくない。

「ああ、そうじゃ……あんたの故郷くににもおなじ名の名所があつたに——一本松——

……忘れもせんぞに、私わしが十三か四の頃や、洞齋兄わしさえ、まだ、尾山（金沢を云う。近国近郷の称呼。）の、あんたの家うちへ寄宿せぬさき、親どもに手を曳ひかれて、お城下の本願寺、お末寺へ参詣

した時、橋の上からも、宿の二階からも、いい姿に、一目に見は  
らされて今でも忘れはせんのだが、その昔、あすこに心中があ  
ったそうやに。」

「……聞いています。」

「その心中に、くどき、くどきや、唄があつて、あわれなものや  
が、ご存じですやろ。」

「いや、いいえ知りませんよ。」

私はまるつきり知らなかった。

小山直植は、時に盃をあらためて、

「私は、まるで知らなかった——同郷です、あなたは大方、ご存

じでしよう。」と云った。

筆者わたしも更に知らなかつた。

「ちつとも知りません。聞いたこともありません。」

「妙ですな、お国ものが誰も知らないで、隣りの能登の田舎の方で知つている。もつとも、その時、間淵の尼の話した処では、加賀の安宅あたくの方から、きまつて、尼さんが二人づれ、毎年のように盂蘭盆うらぼんの頃になると行脚をして来て、村里を流しながら唄つたので、ふしといい、唄といい、里人は皆涙をそそられた。娘たちは、袖を絞つたために今もなお、よくその説句もんくを覚えていると、云つて聞かせました。心中の命は卯辰山に消えたが、はかない魂は浮名とともに、城下の町を憚はばかつて、海づたいに波に流れたのかも知

れません。——土地に縁のある事は、能登屋仁平（にへい）、というのです。いや、不義ゆえの心中の、それは年とつた本夫で、その若い女房と、対手（あいて）が若年の侍です——

——是非と望んで、これは私が聞きました。尼婆さんの他（ほか）の饒（お）しやべり

舌には弱らされたが、これだけは、もう一度、また一度と、

きかせて貰った。調子に乗ると、手拍子が張扇子（はりおうぎ）になつて、し

かも自己流の手ごしらえ。それでもお惣菜の卯の花だ、とお孝の言訳も憎くない。句切だけぐらいだけでも、娘の鼓の手が入つたのです。が説くぞ、説きます、という尼婆さんの口説節（くどきぶし）が、

あわれに、うらがなしく、昔なつかしく、胸にしみて、ぞくぞく心を揺（ゆ）つて、その癖、一本松が、かつと血を湧（わ）かして、火のよう

に酔つて行く。

さんざ浮かれた折ばかり、酔いしれるとは限りません。はかない、悲しい、あるいは床しい、上品な唄、踊、舞を見て、魂ともにも、とろとろに酔つて行く。……あの体で。……あでやかな鬼の舞を視ながら、英雄が酔っぱらった例もあります。いや、いつかの間淵の話じゃないが、蟻の細工までにも到らない、箸けずりの木彫屋が、余五將軍をのみなかまに引込んだ処は、私も余程酔いました。——ま、ま、あなたへ、一杯。」

閑静な席で、対坐に人ませせぬ酒の中に、話がここへ来たころは、その杯を受けた筆者も酔が廻った。この筆者の私と、談者の私と、酔った同士は、こんがらかつても、修理を捌くお手際は、

謹んで、読者の賢明に仰ぐのである。

## 七

「何、唄をお聞きになる、よろしい、やっつけましょう。節なしに……もつとも、節をつけては大変だ。……繰返して、聞いたから、そこ、こころぬきながら覚えています。——恋とサア、というくどきです。

恋とサア情なさけのその二道は、やまと、唐土もろこし、夷えびすの国の、

おろしや、いぎりす、あめりか国も、どこのいづくも、

かわりはしない。さても今度の心中話。それをくわしく



たずねて見れば、加賀の城下のその片かたほとり畔、能登屋仁平が、

これです、年とつた亭主というのは。――

女房にようぼのおとせ、年は二十一愛あいきよう嬌きよう盛り……

ちよつと娘が気になりますね。鼓をうつつてる……年もちようどそのくらい。

いつの頃から夫に忍び、その名岩島友吉こそは、年も二十六、やさがた生れ、きりよう好よいのについ誘ひかされて、人目忍びて逢う瀬の数も、……

――阿漕あこぎが浦たびの度かさなれば、おさだまりで、たちまち近所となりのうわさ、これも定まる処です。

夫仁平は穩厚おんとな生れ、かつと燃立つ胸なでおろし、それが素振そぶりは顔へも出さず……

いいか、悪いか、分りませんが、金沢ものだ、仕方がない、とにかく杯を合せましょう。で、何しろ、かように親類縁者までの耳へ入るようになっては、世間へ済まぬ。今はこれまで、暇いとまをくれよう、どんな夫を持つとも、そうなれば仔細しさいはないと、穩厚おんと人、出方がまことにおとなしい。……もつとも、

そちがこの家やへ来たそのはじめ、わずか年さえ二七の春よ、思いまわせば七年以来……

というのです。二七の春——私はまた……曳船で見た、お冬さんのそのころの年を思った、十五六——

いえばおとせは顔赤らめて、何もいわずに恥し姿。五年  
 六年、年つき日ごろ、かわいい、かわいと、撫なでさするま  
 で、情なさけわすれた不義いたずらを、ぶつか叩くか、しもし  
 ようことを、すいた男を添わせてやると、かかる実意な  
 夫をすてる、冥みようり利すぎます、もつたいなさに、天の冥み  
 加ようがも、いと可おそろ恐しい。せめて夫へ言訳のため、死んで  
 おわびは草葉の蔭と、雨に出て行くゆ夜空の涙……  
 それから屋敷町の暗夜やみへ忍んだ、勿論、小緑らしい。約束つづての礫  
 を当てると、男が切戸から引込んで、すぐ膝に抱く、泣伏す場  
 面、  
 で、

そなた一人をあの世へやろか、二人ならでは死なせはし

ない、何の浮世はただ仮の宿、どうで一度は死なねばならぬ、死んで未来で添遂げようと、いえば嬉しやなおさら涙。さらば最期とかねての用意、女肌には緋ひの帷巾かたびらに、上は単衣ひとえの藍紺縞あいこんじまよ、当世とうせはやりの……

その頃の派手らしい藍紺縞——これを最初に唄った時、尼婆さんは、当世はやりの何とか、と高々とやりながら忘れていた。ちようど、お孝が銚子ひねのかわりめに立った時だったのです。が、尼婆さんの首を捻ひねる処へ上つて来て、

当世はやりの黒縞くろじゆす子の帯……

と言継いだ。ちよいちよい唄うらしい、尼婆さんの方で忘れた処を、きき覚えのお孝が続けたのですが、はて、……呉紹服ごしょうふく綸りんで

はなかつたか、と尼婆さんはもう一度考えましたが、

……黒繻子の帯、二重ふたえまわして、すらりと結び、髪は島

田こうがいの笄長く、そこで男の衣裳と見れば、下に白地の能登

おり縮ちぢみ、上は紋つき薄色一重、のぞき浅黄のぶツ裂羽織さきぼおり、

胸は覚悟の打紐うちひもぞとよ、しやんと袴ももちの股立とりて：

：大小すつきり落しにさして……

——飛んでもない、いや、串じょうだん戯ごじやない、何がしやんと、

股立です。のぞき浅黄のぶツ裂羽織が事おかしい。熱くて脱いだ

黒無地のべんべら紹ろが畳んであつた、それなり懐ふところ中へ捻ねじこ込んだ、

大小すつきり落しにさすと云うのが、洋杖ステッキ、洋杖です。あいつ

を左腰から帯へ突出してぶら下げた形といつては——千駄木の太

師匠に十幾年、年期を入れた、自分免許の木彫の手練でも、洋杖  
 は刀になりません。竹篋たけべらにも杓子しゃくしにもならない。蟻にはもと  
 より、蕪かぶにならず、大根にならず、人参にならず、黒いから、大  
 まけにまけた処が牛蒡ごぼうです。すなわち、牛蒡丸拔ぬきやす安の細身の一  
 刀、これをぶら下げた凧かたというものは、尻尾しつぽじゃないが、十番越  
 に狸まみあな穴から狸に化かされた同様な形です。

ああ、しかし、こういつても——不思議ともいうべき、めぐり  
 合せて、その時、一つ傘からかさで連立なぞりついていた——お冬さんを、おなじ  
 化され夥間なかもだと思われては情なさけない。申訳がないのです。

酔っています。だしぬけにこんな事をいって、確たしかに酔たしかっている。  
 私は息が忙せきこ込みますが、あなたはどうぞ静しずかにお聞き下さい……」

——ちよつと呆氣あつけに取られたが、この言葉で、筆者は静に聞いていた。

「話は前後しました、が、この既にお冬さんの一つ傘に肩を並べた時は、何だか、それなり一本松へ心中に出掛けるような気がしたんですから——この面つらや格好を見ては不可いません。」

直槓は寂しく笑った。

「まあ、しかし忘れぬうちに、唄のあとを続けてからにしましょう。——大小すらりと落しにさして、——という処で、前後しました……」

ここで死んでは憚はばる人目。死出の山辺に燈ひ一つ見える、  
一つ灯ともにただ松一つ、一本松こそ場所屈くつき 竟ようと、頃は

五月の日も十四日、月はあれども心の闇やみに、迷う手と手の相合傘よ、すぐに柄もりに袖絞るらむ。心細道岩坂たど辿り、辿りついたはその松の蔭。かげの夫婦は手で抱合うて、かくす死恥旗てんがい天蓋と、蛇目傘じやのめ開いて肩身をすぼめ、おとせ、あれあれ草葉の露に、青い幽かすかな螢火一つ、二つないのは心にかかる。されど露には影さすものを、わたしや影いとでも厭いといはせぬと、継すがるおとせをまた抱きしめて、女房にようぼ過へ分ぶんな、こうなる身にも、露の影とは、そなたの卑下よ、消ゆるわれらに永劫えいごう未来、たった一つの光はそなた。さらば最期ぞ、覚悟はよいか、いえばおとせは顔ふりあげて、なんの今さら未練があらう、早う早うと



両掌りょうてを合わす、松もかつ散る氷やいばの刃……

つらつら思うに、心中なぞするもんじやありません、後世には酒の肴になる。いや怪しからぬ、いつまで聞いていようというんだ。私は心で叱りました。」——

「——ありがとうございます……厚くお礼を申上げる……唄と、馳走のお厚こ情ころざし、かさねて、ご挨拶を。これで、失礼——心なく、思わず長座をいたしました。何だか帰途かえりに一本松が見たくなりました。」と、機しほに起つと、

「わけないぞに、一緒に行こうかに。」  
 慄ぞつ慄とした、玉露を飲んで、中氣ぐすり薬を舐なめさせられた。その厭いやな心持。酔えいも醒さめたといううちにも、エイと掛声で、上あがりがまちがまちに

腰を落して、直してあつた下駄を突っかける時、

「ああ月が出た。」

と壁の胡瓜を見たんですから、ちらつくどころか、目も磨硝すりガラス子すで、ゆがんでいた。

処へ、ぎつと雨が来ました。土間の鉢植が、土と一所に湿つぽく濡々と香におう。

「お孝や、いいんだよ。私がお送り申すから。」

すぐ傍わきで——いま、つい近い自動車まで、と傘を手にして三和た土きへ出た娘を留めて——優しい声がすると、酒の勢いきおいで素早く格子戸を出た、そのすぐ傍です。切戸が一枚、片暗がりにツイと開く。鉢植でもあろうと思う、細い柳の雨に搦からんで、細い青々とした、

黒堀へ、雪が浮いたように出たんです。袖に添えた紺蛇目傘じやのめがさつと涼しい、ろくろの音で、

「さあ、どうぞ。」

一かげり翳かげった下へ、私は頭は光らないが、小さな蛍のようにもう吸込まれた。送って出たお孝が紛れ込むように、降り来る雨に、一騒ぎ。そこらがざわめく人の足音、潮時の往来ゆききの影。その賑にぎやかな明るい燈ひの町へ向わずに、黒堀添いを傘で導く。

死出の山辺の灯一つ見える、一つ灯ともしに松ただ一つ、一本

松こそ、場所屈竟と、頃は五月の日も十四日、月はあれども心の闇に、迷う手と手の相合傘よ、すぐに柄もりの

袖絞るらむ……

被布ぬきえもんの抜衣紋ぬきえもんで、ぐたりとなつた、尼婆さんの形が、散らかつた杯盤の中に目に見えるよう、……二階でまだ唄っている。

「お危あやうございますよ、敷石たかひくに高低たかひくがありますから。」

「つんのめ つても構かまやしません。」

「あんなこと。」

「そうすれば、おすが縋すがり申す。」

「おほほ。」

「しかし、いいんですか。……失礼ですが、お冬さん……ですな  
。」

横顔よこがほで莞爾にっこりしたようで、唇くちびるが動いたが、そのまま艶つやつや々つやつやとした円鬚まるまげの、手柄てがらの浅黄あさぎを薄く、すんなりとした頸脚えりあしで、うつ

むいたのがうなずいた返事らしい。

「……ほんとうにいいんですか、病気だつていうじやありませんか。」

「ぶらぶらしてはいましたけれど、よもや、こんな処へなぞおいでなさりはしなかりうと思つておりましたのに、真しんそこ実嬉しゆうございますわ。」

「私も嬉しいんです。」

何だか声かすが掠れている。

「まあ、お世辞のいいこと。でも、いま、名をおつしやられて震えましたよ。とても覚えてなぞお在いでなさらないと存じました。けれど、それでもお目にかかりますのに、余り取乱していたもんで

すから、急にあの髪結さんと呼んで、それから湯へ入ったりなんかして……ついお座敷へ伺いますのが。」

夜目にも湯上りの薄化粧と、見れば一層鬢びんが濡れて、ほんのりした耳元の清らかさ。それに人肌といえますか、なつかしい香が、傘を打つしと雨に、音もなく揺れるんです。

「卯の花。」

慌てて、言いそらして、

「曳船を、柳町を思い出します。」

「ねえ、お久しい……二十……何年ぶりですか。私は口不重ぶちようほう宝で、口に出しては何にもいえはいたしません。」

「何をです。」

「いいえ、いいんです。」

「おつしやい、云つて下さい、そうでないと、狸になつて、あなたの傘を持った手に、もじや、もじや。」

「あれ。」

「触りやしない。触りやしないが、ぶら下りかねないというんです。いつて下さいよ。」

「ただね、あつかましいんですけど、片時も忘れはしませんと申す事。」

「ご同然……」

「……」

「以上です。」

「……」

「お冬さん」

「……」

「口をおききなさらなければ毛だらけの手が。」

「それこそ、狸たぬちゃんであらうしやる。」

「ええ、狸。」

「私をおだましなさいます。」

「はぐらかしちや不可いけないなあ、時に、路地を出ましたね。」

下駄がしとつて、燈ひが流れる。

「構いませんか、こんな事をして歩行あるいでいて。」

「里うちですもの、お互に廊下で行逢うもおなじですわ。」



私は酒の胸がわくわくした。

「ところで、自動車の、あります処は。」

「手前どもの、つい傍そばだったんでございますけれど、少し廻まわりみ道ちをしたんですよ。大それた……お連れ申して歩行あるいて済みません。もう直きそこにごございますから。」

「そりや、そりや困る、直きそこじや困るんだ。是非大廻りに、堂々めぐり、五百羅漢、まんじどもえ卍まんじ巴まに廻まつて下さい。唐天竺からてんじくか、

いや違ちがつた、やまと、もろこしですか、いぎりす、あめりかか、そんな、まだるっこしいことはおいて、お願いです、二の橋か、一本松へ連れてつて頂たまきたい。」

「いらっしやる。」

お冬は軽く佇たたずみました。

「ほんとうに。」

「勿論、一緒に行つて下さるんなら。ご迷惑？」

「いいえ、嬉しいんです。でも、まだお目にかかりませんけれど、奥様にお悪くはないでしょうか。」

「名所古跡を尋ねるのは、堂寺まいり同然です、構やしない。後ご生しょうのためです、順礼に報謝のつもりで——ああ、そうだ亀井戸だ。——お酌しやくというのが贅ぜいたく沢たくなら、あなたの手から煙草たばこをのまないじゃ帰らない、いつそお宅へ引返ひっかえすか。」

「それは、でもあの尼が、あなたのお座敷へ出ますのを喜びませんような様子が見えます。」

これはそうらしい。でなくつても、あの顔は見たくない。また  
いかに何でも、ほかの待合なぞへとは言いかねました。もつとも  
そのまま別れる気はない。処へ自動車くるまが見つかった。

弱った、一応は声をかけなければ済まない。

「ああ、柳町へ来ましたね。」

ちようど人丈三つばかりなのが、雨に青い蓑みので立っていて、そ  
の傍わきに空地を控え、おでん屋が出ていました。

「またおもい出します、難ありがた有いい。」

傘の中から面つらと肩はすを斜すつかいに、つつかかるように暖簾のれんの中へ  
突出して、

「や、お閻魔殿えんま、ご機嫌よう。」

「一口にがアぶり、えヘツ、ヘツヘツ、頭から塩という処を……味憎にしますか。」

「味憎は、あやまる。からしにしてくれ、こんにやく 蕪 蕪だ。」

「掛声はありがたいが閻魔はひどうがす。旦那、辻の地藏といわれます、石で刻んで、こく 重味があつても、のつぺりと柔い。」

「なるほど。」

「はんぺんのような男で。」

「はんぺんは不可いけない、蕪蕪だ。からしを。」

「ご酒は……酒はそれこそ、黒松の生一本です。」

「私は、何だつたつて、一本松だよ。」

傘に葉ずれの音がします。うしろから柳の寝ン寝子を着せ掛け

られるような気がして振向くと、一つに包くまったほど、小雨もほの暖く湯上りの白い膚はだが、単衣ひとえを透通るばかり、立っている。

「おお、こりや、雪の家の、ご新姐しんぞ。」

待合の女房にようぼを、ご新姐という。娘のおかみさんがあるのに対してだ、と思われた。

あとで解った事ですが。――

お冬は武家の出で、本所に落魄おちぶれた旗本か、ごけにんの血を引いている。煮豆屋の婆ぼばあが口を利いて、築地辺の大会社の社長が、事務繁雑の気保養に、曳船の飯の一人ずみ、ほんの当座の手伝いと、頼まれた。手廻り調度は、隅田川を、やがて、大船で四五日の中に裏木戸うちへ積込むというので、間に合せの小鍋こなべ、碗家具わんぐ、古ふる

るきようそく

脇息わきいきの類まで、当座お冬の家から持運んでいた、といひます。

その折に、雲原明流先生の内弟子、けずり小僧が訪ねたのです。

それこそ、徳川の末の末の細流は、淀よどみつ、濁りつ、消えつつ

も、風説うわさは二の橋あたりへまで伝わり流れて、土地のおでん屋の耳から口へ、ご新姐であつたとも思われる。

ついでに、

——曳船の時、お十九でいらつしやいましたね、そのあんたの前で、間淵洞斎が類ほおづえ杖をつきながら、十五の私を、おれの女房だと、申しました。それツきり、私は世の中を断念あきらめました——

肌身は、茶碗の水と一緒に、その夜よ、卯の花のように、こなごなに散つた、と言うのを、やがて聞くことになりました。

それも、これも、私が魅ぼかされたのかも知れない。間淵に、例の「魔道伝書」がありましたしょう。女房に相伝していないと言われま  
すか——お聞きになれば分るんですが。

「何を差上げます。ご新姐さん。」

うしろの空地に、つめ襟の服と、印しるし半纏ぼんてん、人影が二つ三つ  
さして来た。

「私は。……」

「しばらく、お見かけ申しません。」

「ご病気だった。それだもの、湯ざめをなさると不可いけない。猪口ちよこで  
なんぞ、硝子盃コップだ、硝子盃。しかし、一口いかがです。」

「では。わざと一つだけ。」

で、硝子盃から猪口へ通わせる。何を通わせるんだか、さながら手品の前芸です。酔方をお察し下さい。

「ご勘定、いいんですよ。」

「よくはありません。」

「私におまかせなさいまし。」

「実はおまかせ申したいんです。溝へ打棄らないで、一本松へ

。」

「はあ、それはご趣向。あとで、お駕籠でお迎いに参りましょう

。」

「棺桶といえ、お閻魔殿。——ご馳走でした。……お冬さん、

そこで、一本松までは遙々ですか。」



「ええ、ええ、遙々……ここから小石川柳町もつと、本所ほどもありましようか、ほほほ——そのの（ぞうしき）から直ぐですわ。」

「そいつは、心中を済ましたあとです。」

「まあ、（ぞうしき）という町の名。」

「これは失礼。」

と、あかる明い町に、お辞儀をして、あの板の並んだ道を、船に乗つたようによろよろ蹠踉した。酔っています。

「交番がありますから、裏路地を。」

「的実、ごもつともです。」

「ね、暗うございますから、お気をつけなさいましょ。」

「おお、冷い。……おん手を給たまわる、……しかし冷いお手だ。」

「済みません。冬も寒うちの中、指は霜の柱ですわ、こんな身体からだで。」

……

「飛んでもない、私から見ると（二十一）だ。何でしたっけ、何だっけ……（年齢としは二十一愛嬌盛り。）……」

「あれ、危い、路が悪いんですから、そんなにお離れなすつては濡れますよ。」

「心得た、（しやんと袴はかまの股もも立たちとりて。大小すらりと落としにさして。）……」

——ここです。濡れに寄るにも、袖によるにも、洋杖ステツキは溢出はみだしますから、件くだんの牛蒡丸ごぼうまるぬきやす拔安ぬきやすです。それ、ばかされていましょ

う。ばかされながらもその頃までは、まだ前後を忘却していなかった筈ですが、路地を出ると、すぐ近く、高い石磴いしだんが、くらがりほのじろに仄白い。深々とした夜気に包まれて階子はしごのように見えるのが、——ご存じと思います。——故郷くにの一本松の上り口あがにそっくりです。

段の数はあるが、一も二もなく踏掛けた。

あたりに人ツ子一人なし、雨はしきる、相合傘で。

「——いよいよ道行です、何でしたっけ……

さらば最期のかねての覚悟。

女肌には緋ひのかたびらに、上は単衣ひとえの藍紺縞あいこんじまよ……

……

でしたかね。」

という時、ふと見ると、おでん屋の燈ひでも、町通りでも気がつかなかつた。暗夜やみの幻影まぼろし、麻布銀座のあかりがさすか、その藍と紺の横縞の、お召めし……ですか、その単衣しゆすに、縷子しゆすではないでしょうが、黒の織物に、さつきの柳の葉まつわが絡まつたような織出しの優しい帯をしめている。

——生霊か、死霊か、ここでその姿が消えるのではないかと、聞いている筆者わたしは思った。さきに「近世怪談録」を見ているほどだから、その浅草新堀の西福寺うらの若侍とおなじく、横路地で冷たい手、といった時、もう片手あやぶきかないほどに氷つたのではないかと、と危あやぶんだくらいであった。

「……やさしい、すずしい帯でした。

女肌には緋のかたびらに……

が、それが、なよなよとした白縮緬しろちりめん、青味がかつた水浅黄の蹴出しが見える、緋鹿子ひがのこで年が少いと——お七の処、磴だんが急で、ちらりと搦むからのが、目につくと、踵かかとをくびつた白足袋で、庭下駄を穿はいていました。」

——筆者わたしはその時、二人の酒席つややの艶かな卓子台ちやぶだいの上に、水浅黄の褌つまを雪なす足袋に掛けて、片裾庭下駄を揚げた姿を見、且つ傘しずくの雫の杯洗しづくにこぼるる音を聞いた。熟じつと、ともに天井を仰いだ直槓まるとは、その丸鬚まるまげの白い顔に、鮮麗あでやかな眉を、面影に見たらしい。——熟じつと、しばらくして、まうつむけのように俯向うつむいた。酔

っている。

「や、あなたは庭下駄を穿いていますね。」

吃びっくり驚して私が云った。

「いつそ脱ぎましようか。」

「はだし跣足になる……」

「ええ。」

「覚悟はいいんですか。」

「本望ですわ。」

「一本松へ着いてから。」

「ええ一本松へついてから。」

「一緒に草葉の螢を見ましょう。」

「是非どうぞ。」

「そこまでは脱がせません、玉散る刃を抜く時に。」

が、例の牛蒡丸の洋杖ステツキで、そいつを捻ひねくつた処は、いよいよもって魅つままれものです。

——さて、その一本松です。夜目に見て、前申した故郷くにの松にそのままです。一体、名所の松といえば、それが二本松、三本松でも、実際また絵で見なくても、いい姿はわかるものです、暗夜やみの遠燈とわびの、ほの影に、それに靄もやをかけた小雨なんです。

——ああ、まだあすこをこごらんにならない。——実は私もその夜がはじめてで。

事情あつて、その後も、あの一本松、また寺の石磴のあたりまでは参りましたけれども、石磴を上つたつて松も何もありません。磴は横です。真向うに、その夜、真暗まっくらな上り道がありました。一本松はその上なんです。石磴は、のぼると、……寺なのを、まつたくその時は知らなかつた。のみならず、お目にかけていくらい、あの石磴は妙です。あたりに何にもない中に立っているから、灰白ほのしろい空の階子はしごのようで、故郷くにの山道に似た処から、ひとりぎめに、私が先へ踏掛けた。ついて上つたのは、お冬さんなんです。どうでしょう。庭下駄さばで捌つまく棲なまめの媚かしさが、一段、肩にも、腰にも、裳すそにも添つて、上り切ると、一本松が見えたから不思議なんです。



「風はないのに、松の匂においが襲かうと一緒に、弱い女の肌の香が消え  
 そうで。……實際身でしめ、袖で抱きたかった。

心細道、岩坂たど辿り、辿りついたはその松の蔭、

……その一本松よき死場所と、

かげの夫婦は手で抱合うて……

それから何でしたつけ。」

お冬が、

「……かくす死恥……ですわ、そんな、唄、うたつてかまいません  
 んか。」

かくす死恥旗天蓋てんがいに、蛇目傘じやのめ開いて肩身をすぼめ……

あれ、お燈とうみょう明が、石燈籠に。

おとせあれ見よ、草葉の露に、青い幽迷<sup>かすか</sup>な萤火一つ……

蛍のようですわね。」

「お燈明。」

「ええ、ねえ、ごらんなさい、この松には女の乳を供えるんです。  
」

「飛んでもない、あなたの乳なぞ。……妬<sup>や</sup>ける、妬けます。」

と云った。……乳とただ言われただけで、お冬さんの胸が雪白に見えるほど、私の目が、いいえ、お冬さんのという言葉が、乳にかぎらず、草といえば、草、葉といえば、葉、露は、露、蛍は、蛍、燈明が燈明に見えたんです。何よりも一本松が一本松に、ありありと夜中に見えたんですから化<sup>ば</sup>かされていたに違いな。いや

それ以上、魔法にやられていたのです、——「伝書」をお忘れになりますまい。ところで、唄の忘れた処は、その胸に手をあてて、お冬さんが思い出しては、つけてうたつて、聞かせました。

「あの、……（わたしや蔭でもいはいはせぬと、すが縫るおとせ）……何ですか、もんくでも私の口からだとあつかましい。」

「それはこつちでいう事ですが、何でしたっけな……縫るおとせをまた抱きしめて……」

……縫るおとせをまた抱きしめて、女房過分な、このような身にも、露の影とは女の卑下よ、消ゆるわが身に永劫  
未来、たった一つの光はそなた。

あ、お燈明が、蛍が消えた。」

手を取りました。

「私も消えとうございますわ。」というのです。

——（同好の怪談は、ここでお冬さんが幽霊になって消えるのか、と筆者はまた思った、が、そうではなかった。）——  
「私も消えとうございますわ。」

と、お冬さんがいった時です。松をしぶいて、ざつと大降りになった。単衣ひとえの藍あゐ、帯の柳、うす青い褌つま、白い足袋まで、雨明あまあかりというのに、濡々と鮮明くつきりした。

「傘では凌しのげません、雨宿りに、この中へ消えましょう。」

と、その姿で……ここは暗闇くらやみだ。お聞きになるあなたの目に、もう一度故郷くにの一本松を思い浮べて頂きたい。あの松の幹をです。

立上りはしないで、傘なりに少し屈かがみ腰こしになつて、その白い手で、トンと敲たたいたと思うと、蘭燈らんとうといひますか、かさなり咲いた芍しやく薬やくの花に、電燈を包んだような光明がさして、金欄きんらんのふすま桂きしきしとねさんご珊瑚さんごの枕、瑠璃るりの床、瑪瑙めのうの柱、螺鈿らでんの衣桁いこうが燎りよう爛らんと輝いた。

覚悟をしました。たしかに伝来の魔法にかかった。下司げすと、鈍痴と、劣情を兼ね備えた奴やつことして、この魔法にかからずにいられ  
ますか。

その上に大酔悩乱です。——一度はいつか、二日酔の朝、胸がうえした上下はねあがに跳どつき上り動悸あおむをうつと、仰向けあおむに寝ていて、茶の間の、めくり暦の赤い処が血を噴いた女の切首になつて飛上り飛下りし

たのを忘れない。それにもました惑乱です。

のめり込んで、錦爛の裡なかにほかんとすると、

「一口、めしあがりますか。」

「何の事です、それじや狒ひひ々の老おい耄ぼれか、仙人の化物になる。」

と言つたんだから可おそ恐ろしい。

狸まみ穴あなの狸じやないが、一本松の幹の中へ入つた気で居て、そ

れに供えるといふ処から、入りしなに塚びんに詰めた白いのを、鼻はな

頭きで搔分けたつもりで居る。それが朦朧もうろうとして、何だかお冬

さんの懐の中へ、つまみ込まれたようだったものですから。……

何にしる魔法にかかった、いよいよ魔法に掛かつたに相違ない。一

口、というのさえ酒でなしに、魔法に限ります、かかり切りにな

「つていりや申分はありません。」

といつて、肩のめりに、ぐったりと手を支いた。

この獅子屋ししやさん、名も直槓が、くなくなになつたから、余程よっぽどおかしい。

いや、話は可笑おかしいのではないのである。

## 八

「御加護、たまわれ。」

……………

——さて、かくて、曳船の卯の花の時の事、後あとに柳町の折とて

は、着て肌を蔽おおうほどのものもなかった、肌襦袢はだじゆばんとあれだけでは、襖ふすまから透見も出来なかつたことなど聞き、聞き……地蔵菩薩の白い豆腐は布ばかり、渋黒い菟藟うづらぎは、ててらにして、浄玻璃じようはりに映り、閻魔王の前に領伏ひれふしたような気がして、豆腐は、ふつくり、菟藟は、瘦やせたり。二個の亡者は、奈落へ落込んだ覚悟で居る。それも良心の苛責かしゃくゆえでありましょうのに、あたりの七宝莊嚴なのは、どうも変だ、といよいよ魔法にかかつて、とろとろとしたと思う。

………

「御加護たまわれ。」

かかる場所にて呼び奉るを、許させらるるよう、氏神を念じて



起上った私は、薄搔卷うすかいまきを取つて、引被せてひつかぶ、お冬さんを包んだ  
 のです。おさえた袖がわなわなと震えるのは、どうも踊るような  
 自分の手で。——覚悟をすると、婦おんなは耳も白澄しらすむばかり、髪も、  
 櫛なかせしも、中指も、しんとするほど静しずかです。

「誰だ！」

どころじゃない。大きな天井に届く老婆おばあの顔が、のしかかつて、  
 屏風びょうぶ越こしに、薄髭うすひげの頤あごでのぞいている……その凄すげさというもの  
 は。

もつとも、うとうととするうちに、もそりもそり裙すそで動いたも  
 のがある。鼠、いや、猫より大きい。しかも赤ツちやけたものが、  
 何か動く。紅いものといつては、お冬さんはちらりともつけてい

なかつた。第一、身づくろいをするに於ては、腰を上げ手を伸ばし、余りに人品が悪過ぎる。夢か、犬かと、思ったのが薄汚れた、赤袴あかばかまです。赤袴あかばかまの這身はいみで忍んで、あらかじめ、お冬さんの衣ころもにも掛けず嗜たしなんで置いた、帯を掴つかみ出して置いたのです。それを、柳やなぎに濡色つやつやな艶つやつや々と黒いのを、みしと踏ふんで、突立つたつたのが、あと足で蹴退けのけると齊ひとしく、

「誰だ、何が、誰だとは人間に向うてよういうた、にい。畜生のくせにして、おのれ。」

とその袴で、のしのしと出て坐つた。黒の被布にぶいろで、鈍色鈍色の単ひ衣とえの白襟とえで、窪みひらんだ目を睜みひらいた。

「おお見た処が、まだ面相は人間じゃに、手は、足は、指なぞど

うぞに、もう犬猫の毛が生えてはせぬか。どれ、てのひら掌など、ちよつと見せやれ。に、どれ、どれ。」

私は引ひっぱら払つて手を引いた。幻に見えるのは、例の黒い瓶かめの煉ね薬りやくです。——その向つた柱には、どんな姿が、どんなありさまになつていたとお思ひになります、これにかかつては堪たまらない。汚らわしい。

「何をするんだ。触つちや不可いけない。」

「触つたら嬉しかろ、難ありがた有あいとおもいなされ、そりや犬猫に、お手々という処じやがや。」

「犬猫、畜生とは何だ。口が過ぎよう。——間淵の妹。」

「うん、小山弥作——何で尼の口が過ぎる。畜生、というたが悪

。　　「　　いと思うか。くろよ、くろよ、ぶちよ、ぶちよ、うふふ、うふふ。」

と、いやらしく口を割って、黄色い歯で笑ったあとを一ひと睨み睨んだ。目が光って、

「この牡。おす」

「牡。」

余りの事に、私はむきと居直った。

「牡、牡よ。そつちの牝めすも鬣まげの鬢びんが、頬先に渦毛うずげを巻いとる、見しやれ。人間の言葉が通ずるうちに、よう聞け、よう聞けや。」

牝が傘さいて、この牡を送って出たまではよかつたれどな、帰りが遅い。その遅いだけでさえもじや、お孝がどないにも氣を揉も

んだいのう。起たつたり居たり、門かどへ出る、路地を覗のぞく。何をそわつくやら、尼けぶも希有なと思うとるうちに、おでん屋で聞いたそう  
な、一本松の方へ、この雨の降る中、うせたとな。

お孝が早や、あわれや、見得も外聞もない。裙すそをくるりと、あの坂を走り上った。うれしやな、ああさん、と駆けよつたのが、あの、ほの白い松の根の建たて札ふだや、とにい、建札が顔に見えるよ  
うやったら、曝さらしくび首くびじゃが、そらほどの罪……を、また犯いたぞ。  
ぞ。」

その松の中へ、白鷺ふくろねぐらと梟ねぐらが峙たてした夢は、ここではつきり覚めま  
した。七宝よそおいの粧らでんも螺鈿いこうの衣い桁こうもたちまち消えて、紗綾さや、縮ちりめん緬めんも、  
藁わら、枯枝、古綿ふるわたや桃色の褪あせた檻ぼろ樓ろうの巢ねとなつたんです。

「かねてから私も知つとる、お孝はなお孝はな、……それがために、牝めす、われが身になつて、食いものねだりの無理非道よりも泣かされたぞ、に、に。牝、牝も骨身……肩、腰、胸、腹、柔やわい臄ずいまで響いてこたえておろうに。洞齋兄がや、足腰の立たん中氣の病人がや、四年越、間まがな、隙すきがな、牝の姿が立違うて、ちよつとの間見えぬでも、噛かみついて、咽のど笛ふえを圧おし伏ふせるようにや、氣精を揉もんだは何のためや、お冬おのれが、ここな、この、木彫師、直槓。」

私は呼吸いきを詰めた。

「小山さんじゃ。まだその時は牝、とはいうまい。また牝、ともいうまい。その時には、金輪際、みだら、ふしだらはなかつた。

また有るわけもないかじや事は、尼も、洞齋兄の身にかわつて天地を見抜いてよう知つとる。じやが、病人は、ただそれのみを、末期まで、嫉妬しつとに嫉妬して、われの貞操みさおを責め抜いたに、お冬も泣かされれば、尼かて、われの身になつて見て、いとしゆうてならなんだ。

うう、因果やの、前世ごうの業ごうというは可恐おそろしい。曳船えいせんでも、柳町でも、この直槓ちかぼうの形が家の内やへ躡あられると、棟、柱、梁はりに崇たられた同然に、洞齋兄は影を消すように引越して、あとをくらまかいた、二十何年もたつて、臨終りんしゆうにも、目を瞑つむらず、二世三世せまでも苦しんだ。嫉妬、怨念おんねん、その業因ごういんがあればこそ、何の、中氣ちゆうきやかて見事に治療をして見せる親身の妹——尼の示現しげんの灸きゆうも、その

効かがなかつたというもんやぞ、に。」

黒い瓶、いやその信玄袋を、ひしと掴つかんで、

「に、それやもんの、あだ果報な、牡めは、宿業として、それだけお冬に思われておつた、自おのずから夫の病人にその氣が通ずる、に、に。それやよつてじや、相合傘で送つて出て、一本松にも居おらぬとすりや、雨の中を、いつまでも、どこへどう行くもんや、つもつても知れておる。……知れるよつてに、お孝が半狂乱じや、松の辺には居おらぬと見て、駈かけずり歩あり歩いて、捜しまわつた、脛はぎの泥の、はねだらけで、や、お仏壇の前に、寝しなのお勤ごんぎよう行をしておつた尼の膝に抱きついた。これがや、はや、に、小猫が身を揉むように、



——助けて下さい、お媼ぼあさん——

と、いいか、

——私は畜生になります——

とじゃに。」

ただ引伏せた練絹ねりぎぬに似た、死んだようなお冬の姿が、撓しなうばかりに揺れたのであります。

「私も、わけをきいて、う、五寸の焼釘を、ここの肝へ刺されたぞ。——畜生になります——とお孝がいうた一言じゃ。」

「どうしたんです。お孝さんが何をいったんだ。」

「言うか、言おうか。」

「ええ、可い厭やな息を掛けるない、何だ。」

「聞くか、聞くか。また、聞かさいで、おかりようか。おのれら二人は、いい事にして、もと友だちの、うつくしい女房、たかが待合の阿媽おかあ。やかれても、あぶられても、今は後家や、天下晴れ察度はあるまいみだらじやが、神仏、天道、第一尼らが弘法様がお許しないぞ。これ、牡。」

「お黙んなさいよ。」

「うんや黙らん、牡、いや、これ小山直槇どの。あんたは過ぎた——何の年、何の月、何の日の、雨の降る夜よに、友だちと三人づれ、赤坂の……何の待合で……酔倒れて……一夜あかいた……覚えがあるでしょ……でしょ……でしょ……その時の……若い芸妓げいしやを……誰やと思う。」

(こぶし拳を握って、ハタと卓ちやぶだい子台について、がつくり額を落したから、聞いている筆者わたしは驚いた。)

「ああ。」

「もうその声が畜生の呻うめき唸じや、どうじや、牡、何と思う。牝、どうや。」

と、尼婆がじりじりと枕へ詰寄せる。袴の赤いのが、お冬さんの細首を裂く血に見える。

「これ、夫の妹、おつかわしめの尼に対して、その形は何じやい、手をつけ、踞かがめ、起きされ、起きされ、これ。」

「はい。」

といて、前髪を枕にうつむいた。

「起きぬか。這え。これ、やっと片手をついた処は、片膝もまた  
 げたじやろ、に。左か、右か、毛縮緬などからめかいて、いやら  
 しい、犬がしいこくとおなじじやぞに、に、に。」

かつとなった、私は子供のうちから手にする鑿のみ小刀は、今ぞ、  
 この時のためではないか。畜生、いや、これは怪我にも口にすべ  
 きではない。飛びかかつて、と思つて、また悚然ぞっとしました。

お冬も、ぶるぶると震えたんです。

「身を震わすの、身ぶるいするの、毛並を払ふの、雨のあとのや  
 ー」

「姨おばさん、殺して……殺して……」

「何、殺せじや、あははは、贅ぜいたく沢な。これ、犬ころしにはなら

ぬぞ、弘法様のおつかわしめは。」

私はぐうたらな癖に、かつとなる、発作的短気がある。

「お冬さん、死のう。」

「……嬉しい。」

「ただし、ばばあ婆を打殺して。」

「あれ、あなた、私だけ、私は覚悟をしています。」

「よい、よい、よい、よい。死ぬ、死のう。殺すとやに、そこま  
で覚悟がついたれば、気を落ちつけて聞きんされ。や、や、二人  
とも、よう聞きんされ。これまでは罰や、罪業に対する一応の訓い  
戒ましめじゃ。そこを助ける、生きながら畜生道に落ちる処を救いた  
まわる、現当利益りやく、罰利生りしやう、弘法様はあらたかやぞ。

おつかわしめの厄がや、示現の灸で助けてあげる。……

形ある、形ない、形ある病やみわづらい、疾、形ない悪業、罪障、それを

滅くりきするこの灸の功力ぞに。よつて、秘法やぞに。この法は、業病

難病、なみなみならぬ病ともまた違うて……大切な術ゆえに、装束をあらためて、はじめからその気で来たや。さ、どうや。お冬さん……もう牡牝はいわんぞ。お冬さん、あんたも知つてじやろ、別しての秘法は、艾もぐさも青々となる瑠璃るりの白露のようながや。」

「助けて下さいまし、お厄にさん、そうして、お灸は、どこへ。」

「魂は、胸三寸というわいの。」

「ええ。」

「鳩尾きゆうびや、乳の間あいや。」

「……：恥しい。」

「年でもあるまい。二十はたち越した娘を育てたものが、何、恥しい。

何、殿方に、ははは、こりや好いた人には娘のようじゃ。」

「夜もふけました、何事も明日にしてはいかがです。」

「滅相な、片時へんじを争う。一寸のびても三寸の毛が生えようぞに。

既に、一言を聞いた時、お孝には、もう施した。二人のためには  
手間は取られず、行方は知れぬ。こんな場席を、仏智力、法力を  
もって尋ねるのは勿体ない。よって、魔魅や、魔魅の目と導きで  
探つて来たぞに、早う、なされんかに、お冬さん。」

「はい。」

「さ、お冬さん。」

「はい。」

「これ。」

「はい、でも。」

「ええ、うじうじして、畜生。」

「……お尼さん、助けて下さい。」

「それ、見され。」

黒い皺しわ手で、雪の胸。……

「おお、軽々と柔こう、畜生になる処を、はや、ひっくり返った。」

がばと開けて、

「それ、救の手が届くと、はや、白い天人が仰向あおむいたようじや。」



ええ、邪魔な。」

細い、霜を立てたように、お冬が胸に合せた両掌りょうてを、絹を裂くばかり肩ぐるみ、つかみ伸のしに左右へ割さばいた。

「熱うない、知つての通り、熱うない、そのかわり少し大いぞ。でっか」

艾うごめですが、縦に二筋、数六つ。およそ一千足の子を孕はらんだ蜘蛛くもの蠢うごめくように、それが尼の手につれて、一つ一つ、青い動悸どうきで、足を張つて動く。……八つの乳となりはしないか、私は肩から氷をあびた。

「やの、したたかな冷汗や、胸へ走るの、流れるの、熱うはない。」

と吐ぬかいて、附木もちかざを持翳かざすと、火入ひいれの埋うづみび火びを、口が燃えるよ

うに吹いて、緑青の炎をつけた、芬ぶんと、硫黄いおうの臭においがした時です。

「南無なむふげんだいぼさつ普賢大菩薩、文珠もんじゆしり師利。……仕うる獅子も象も獣だ。灸は

留めちまえ、お冬さん。畜生になろう、お互に。」

「おお、象よかる、よかる。手では短い、その、くにやくにやと  
した脚を片かた股もももぎとつて、美婦がった鼻へくツつけされ、さぞ  
よかる。」

「あ、あ。」

「その象結構だ、構うものか。」

「……いやです、あなたが獅子でも、象でも、私は女で、影にも  
添っていたいんです。」

——こんなに、いとしい思いをした覚えはない。

「よし。」

私は大胡坐おおあぐらで胸を開けた。

「尼さん、療治をうけよう。」

——火は熱いか、熱くないか、とおっしやるんですか。いや、それは……

何だといって、六つずつ十二の煙が、群むらりまとい這いまつわる、附木の硫黄は、火の車で、鉄の鍋の中に、豆府と菘蕪がぐらぐらと煮える……申しますまい。口で言うだけでも、お冬さんを、我が手で苛いじめ虐しげるに齊ひとしいんですから、ただ幻に見て、爪さきの尖さままで、青くなつた時に、お冬さんが一言ひとこと幽かすにいました。

「草葉の、露に、青い、螢が、見えますわ。」

と手術でもうけたあのように、やっと立って、それでも、だ  
てじめの上へ帯を抱えたなりに、膝をなやして、戸を出る私の背  
に縫すがつて、送ろうとするのを、

「慎いみしませい、灸いみの忌いみじや、男おとこの傍そばへ寄よつてもならん。」  
と、袴をはだけて、立ちふさがって突きのけた。

「そこで、戸を膝いざ行いつて出た私ですが、ふらふらと外へ出たのは  
一枚の開戸ひらきどぐち口くちで。——これが開あいたのを、さきには一本松の幹  
だと思つた。見ると、小さな露台があつて、瀬戸の大鉢に松うわが植う  
つています。一本松ではありません、何とかいう待合、同業の家うち  
だった。目の下が、軒並の棟を貫いて、この家の三階へ、切立  
のように掛けた、非常口の木の階段だったのが分りました。い

れ、客の好奇心を嗾<sup>そそ</sup>ろうといった<sup>あつら</sup>た逃えと見えます。確に寺の磴<sup>だん</sup>へ上ると思つて、いつの間にか——これで庭下駄で昇つた女に手を曳<sup>ひ</sup>かれたのでは、霧に乗つた以上でしょう。

ずり落ちる下界は、自動車が（ここへは通る）待つていました。傍<sup>かたわら</sup>に、家業がら余程奇を好んだと見えて、棕櫚<sup>しゆろ</sup>の樹が鉢<sup>つた</sup>に突立てある、その葉が獅子の頭<sup>かしらげ</sup>毛のように見えて、私は、もう一度ぐらぐらと目が眩<sup>くら</sup>んだ、横雲黒く、有明<sup>ありあけ</sup>に……

あけがた家<sup>うち</sup>に帰つてから、私は二月ばかり煩つた。あとで、一本松、石磴<sup>いしだん</sup>の寺、その辺までは密<sup>そつ</sup>と参りました。木戸をも閉めよ、貫木<sup>ぬき</sup>をも鎖<sup>とぎ</sup>せ、掛矢で飛込んでも逢いたい。心に焼くように、雪の家の空あたりが、血走る目で火の手になり、赤いまでに見える

けれども、炎を水にし氷にしても、お孝という、赤坂で一度間違  
いをした娘に顔が合わされません。

畜生でも構わない、逢えさえすれば……

心を削り、魂を切つて、雌雄の——はじめは人の面おもてのを、と思  
いました。女の方は黒髪を乱した、思い切つて美しい白い相の、  
野郎の方は南かぼちや瓜むこうはちまきに向む願こう卷ちまきでも構わない。が、そんな異相な  
木彫とすると、どこの宮堂でも引取りません。全身の獅子ししを刻ん  
で、一本松——あの附近の神社へ納めたんです。

名家の馬が草を食いに、夜、抜出たのではない。牝獅子めししの方が、  
どうした事か、間もなく石磴を飛んで裂けました。―

直槓はここで目を閉じた、が、はらはらと落涙した。

「……ちようどその頃だと言います。人にはいえず、打明けては頼めない事ですから、そこいら差触りなく、おでん屋などに幅の利きそうな若い男を頼んで、あのあたりの様子を聞くと、雪の家のごしんぞは、気が狂ったろう、乳ちのまわり、胸に、六ところ、剃り落しても剃り落しても赤あか斑まだらの毛が生える、浅間しきなまげ、情なきに取詰めた、最後は、蜃女あまの絵が抜出したように取乱して、表二階の床の掛軸「喝」という字に、みしとくいつくと、払子ほつすをサツと切破いた、返す、ただ、一剃刀ひとかみそりで。

この事があつてから、婆さんの尼は、坂東三十三番に、人だすけの灸を施し、やがては高野山に上つて更に修行をすると云つて、飄ひようぜん然うちと家を出た。扮装いでたちが、男の古帽子を被りかぶ、草鞋わらじで、片

手に真ま黒くろな信玄袋、片手に山伏の貝を吹いて、横町をそのまま出ました。西の方かた、その坂東第一番に向つた。その後沙汰のちはない。しかし、灸は実によく利いた。人間業わざに似ない、と界隈かいわい一帯、近く芝、となり赤坂辺まで、その行方を惜しむといひます。

——雪の家は、川崎辺へ越した、今はありません。

尼が畜生道に墮おちるのを救うといつたのも、怪しい縁によつて、私はおびき寄せたのも、……どうもはじめから、兄洞齋の、可おそろ恐こい嫉妬の怨念に酬むくゆる、復讐ふくしゅうの呪詛のろいだつたとも思われません。しかしまた怪しい業通ごうつうによつて、かねて企図したものだつたかも知れません。何にしても、私のために、かわいそうな、はかない、お冬……」



と、いうとともに、直槓は胸を切られたように、蒼あおざめて、両手で肩を抱いたのでありました。

毛が生えていたかも知れない。血をはいていたかも知れない。その胸を、とは、さすがに筆者わたしも聞き得なかった。

直槓がなくなつて、もう三年になる。

筆者わたしは、あの時以来、一本松へはまだ行つて見ないで居る。恐れて毛並は見定めなかった、坂を駆出したのは、残つた獅子だつたかも知れません。

だから、家うちへ帰つて、少しばかり足を気にしたのも、そんなにお笑いにはなるまいと思う。……

昭和十二（一九三七）年十二月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日第1刷発行

初出：「中央公論 第五十二年第十三號」

1937（昭和12）年12月

※訂正注記に際しては、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪柳 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>